

令和6年度 ポストスポーツ・フォー・トゥモロー推進事業
(国際情勢に応じた海外アスリート等支援事業)

事業成果報告書

SFT-NSSU HOPE PROJECT REPORT
High-performance support for Overseas Para-athletes under Emergency

日本体育大学

令和7年(2025年)3月

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、日本体育大学が実施した「令和6年度ポストスポーツ・フォー・トゥモロー推進事業（国際情勢に応じた海外アスリート等支援事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

目次

1. 事業の概要	1
1) 事業の趣旨	1
2) 事業の目的	1
3) 事業の期間	1
4) 事業実施体制	1
5) 支援対象団体	2
6) 支援の条件	3
7) 事業の実施日程	4
2. 事業実施内容	5
1) パレスチナ NPC 選手団受入プログラム	6
2) イエメン NPC・レバノン NPC 選手団受入プログラム	24
3) アフガニスタン NPC 選手団受入プログラム	33
3. 広報媒体での発信・取材情報	43
4. 本事業を通じて得られた知見と今後に向けた考察	44
1) 国際情勢に応じた海外アスリート等支援における成果と限界	44
2) NPC の脆弱性とアスリート支援の間に見えてきた構造的課題	44
3) 支援の設計における留意点と将来に向けた示唆	45

1. 事業の概要

1) 事業の趣旨

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会（東京 2020 大会）に向けて、日本政府が推進してきたスポーツ・フォー・トゥモロー（SFT）プログラム（2014 年度から 2021 年度まで実施）は、官民の連携協力により世界の 204 か国・地域、1,300 万人以上（2021 年 9 月末時点）の人々にスポーツの価値を伝え、オリンピック・パラリンピックムーブメントを拡大してきた。この取り組みにより、スポーツを通じて日本の存在感を世界に示すとともに、国際的な課題である持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて大きく貢献してきた。

この SFT 事業をさらに発展させることは、東京 2020 大会のレガシーを継承するものであり、スポーツを通じた国際協力や国際貢献を推進することに繋がる。日本のスポーツが世界でリーダーシップを発揮するためには、これらの活動や交流を通じて、人的な信頼関係を醸成し続けることが不可欠である。

以上を踏まえ、SFT の下で構築された官民協力体制（スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム（SFTC））や、これまでの取り組みを東京 2020 大会のレガシーとして継承し、パリ 2024 オリンピック・パラリンピック競技大会や第 5 回アジアパラ競技大会（2026/ 愛知・名古屋）などを念頭において、スポーツを通じた国際協力による日本のスポーツの存在感を示す取り組みを発展的に実施する。さらに、日本の強みを活かしたスポーツによる国際協力事業を通じて、SDGs への貢献を実現していく。

このような事業を通じて、日本は国際的なスポーツリーダーシップを強化し、スポーツを通じた平和の構築や人権の尊重、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを推進する。スポーツは国境を越えて人々を結びつける強力な手段であり、本事業を通じて、スポーツの力で国際社会における日本の存在感を高め、持続可能な未来を共に築いていくことを目指す。

2) 事業の目的

本事業の目的は、紛争等の国内情勢により自国内で練習環境が整わない海外アスリートに対し、日本国内での合宿やトレーニングを支援することにある。期待される効果としては、以下の点が挙げられる。

1. 日本又は海外で開催される競技大会への出場
2. 競技力の向上：海外アスリートが日本国内で質の高い練習環境を享受できることにより、競技力が向上し、国際大会での活躍が期待できる。
3. 国際協力と連携の強化：日本のスポーツ界が国際的な協力と連携を強化し、日本の存在感を世界に示すことができる。
4. 平和構築への寄与：スポーツを通じた交流を等して、紛争地域のアスリートと日本の子どもたちが互いに理解し合い、共感を深めることで、平和と共生の価値観が広まる。
5. SDGs への貢献：SDGs の達成に向けた取り組みが強化され、維持可能な社会の実現に貢献する。
6. 第 5 回アジアパラ競技大会（2026/ 愛知・名古屋）の成功支援と新たなレガシー構築：特に、第 5 回アジアパラ競技大会（2026/ 愛知・名古屋）に向けた支援を通じて、アジア地域のパラアスリートの競技力を向上させ、大会の成功を支援する。さらには東京 2020 大会のレガシーを更に発展させることができる。

これにより、スポーツを通じた平和と繁栄の実現に寄与し、日本が世界におけるスポーツシーンでのリーダーシップを発揮するための基盤を強化することが期待される。

3) 事業の期間

本事業の期間は、本事業委託契約の締結日である令和 6 年 8 月 19 日から令和 7 年 3 月 31 日であった。

4) 事業実施体制

本事業は表 1 に示した実施体制にて遂行した。事業実施責任者として、日本体育大学（以下、本学）副学長であ

る水野増彦教授が位置付き、全体の統括を行った。事業実施責任者代理として、過去にスポーツ庁委託事業戦略的国際間スポーツ国際貢献事業（パラリンピック参加国・地域拡大支援）（以下、NEPP）の実施責任者を務めた伊藤雅充教授が位置付き、実質的な事業の運営を担当した。事業コーディネーターとして、NEPPの事業スタッフを務めていた高野文子を新たに雇用し、伊藤との協力のもと、事業全体の運営を行った。このほか、事業運営スタッフとして表1の名簿に示した6名の教員を始め、多くの教職員が協力した。外部アドバイザーとして日本パラスポーツ協会・日本パラリンピック委員会（JPC）所属でアジアパラリンピック委員会の理事を務める安岡由恵氏が協力した。

5) 支援対象団体

本事業における支援対象団体は、各国のパラリンピック委員会（NPC）とした。各国 NPC は障がい者スポーツ全体を見渡し、多様な障がい者アスリートに対する包括的な支援を提供しており、パラリンピックやアジアパラ競技大会への選手派遣において中心的な役割を担っている。また、それぞれの国・地域において支援を必要としているアスリートの状況を的確に把握していると考えられたことから、支援対象の団体として適切であると判断した。NPC をカウンターパートとすることで、特定の競技に限定されず、幅広いアスリートに支援が行き渡ることが期待された。さらに、本事業では日本パラリンピック委員会（JPC）との協働を前提とし、JPC がこれまでに築いてきた国際ネットワークを活用することとした。そのため、支援対象となるアスリート等の選定においても、各国 NPC を主要な連携窓口とする体制を構築した。

本事業においては、支援対象としてアジア地域からパレスチナ、イエメン、レバノン、アフガニスタンの4か国を選定し、各国の NPC との連携のもとで選手および関係スタッフの招へいを行った。また、ウクライナに対しても支援の意向を伝え、連携の可能性を探ったが、当該年度中に具体的な依頼はなかったため、支援の実施には至らなかった。

これらのアジアの国々を中心に選定した背景には、2026年に日本で開催される第5回アジアパラ競技大会（2026/愛知・名古屋）の存在があった。同大会の成功に向けては、より多くの国・地域からアスリートが参加することが重要であり、とりわけ国内情勢が不安定でトレーニング環境の整備が難しい国々に対しては、早期かつ継続的な支援が必要であると判断された。また、JPC が有する国際的ネットワークの活用可能性も踏まえ、調整の現実性を含めた多角的な観点から支援対象を選定した。

表1 本事業の実施体制

役割	氏名	役職	事業での役割
事業実施責任者	水野増彦	副学長	全体統括
事業実施責任者代理	伊藤雅充	コーチングエクセレンスセンター長	全体統括・スポーツ庁連携 ・JPC 連携等
事業コーディネーター	高野文子	事業専属スタッフ	運営全般
事業運営スタッフ	山口和之	スポーツ文化学部スポーツ国際学科長	学生による事業支援調整
	齋藤隆志	スポーツマネジメント学部長	学生による事業支援調整
	岩原文彦	コーチングエクセレンスセンター 兼任教員	国内パラスポーツ団体との折衝
	佐良土茂樹	コーチングエクセレンスセンター 兼任教員	コーチの能力向上支援
	矢崎シャーリー夏	コーチングエクセレンスセンター 助教	運営全般
	矢野広明	コーチングエクセレンスセンター 助教	運営全般
外部アドバイザー	安岡由恵	アジアパラリンピック委員会理事	各 NPC との連携支援

各国の状況と選定理由は次に示すとおりである。

(ア) パレスチナ

パレスチナは長年にわたる紛争と政治的不安定の影響を受け、スポーツインフラが十分に整備されていない状況にあった。特にガザ地区やヨルダン川西岸地区では、移動の自由が制限され、資源の不足も深刻で、アスリートが質の高いトレーニング環境を確保することは極めて困難であった。さらに、2023年10月には、ハマスによるイスラエルへの大規模攻撃とそれに続く戦闘により地域情勢が急激に悪化し、アスリートを取り巻く環境は一層厳しくなった。こうした状況下においても、パレスチナ NPC は支援に対して明確な意思を示し、受入に向けた調整にも積極的であったことから、支援効果が見込まれる対象として選定した。

(イ) イエメン

イエメンでは、正統政府およびアラブ連合軍と反政府勢力ホーシー派との間での衝突が長年にわたり継続しており、社会全体が「世界最悪の人道危機」とも形容される深刻な状況に直面していた。2022年4月には全土での停戦が合意されたものの、同合意はその後失効し、小康状態が続いていた。このような情勢のもと、スポーツに安心して取り組むことは困難であり、特に障がい者アスリートにとってはトレーニング施設や人的支援の不足が顕著であった。イエメン NPC からは複数種目に関する支援希望が示され、国際大会への参加を見据えた意欲も確認できたことから、対象国として選定した。

(ウ) レバノン

レバノンでは、2022年10月に大統領の任期が満了した後、長期にわたって政治的空白が続き、公共サービスの機能不全や高いインフレ率など、深刻な経済危機に直面していた。こうした状況はスポーツ活動にも大きな影響を及ぼしており、特に障がい者スポーツへの支援体制は脆弱なままであった。さらに、ガザ情勢の影響を受けて、イスラエルと接する南部では軍事的緊張が高まり、治安や人道状況の悪化が懸念された。そうしたなかでも、レバノン NPC からは複数競技に関する支援希望が示されており、国際舞台への参加に向けた前向きな姿勢が見られたことから、支援対象として選定した。

(エ) アフガニスタン

アフガニスタンでは、長年の紛争および2021年にタリバンが実権を掌握したことに伴う政治的混乱により、国内のスポーツインフラは著しく損なわれていた。特に障がいのあるアスリートにとって、安全かつ安定的にトレーニングを行うことが困難であり、国際大会への参加に向けた準備も極めて制約されていた。こうした状況にもかかわらず、NPC からは招へいに応じる姿勢が示され、日本側との連携も比較的スムーズに行える見通しが立ったことから、支援対象国に含めた。

(オ) ウクライナ

ウクライナに対しては、戦時下におけるアスリート支援の必要性を鑑み、事業の趣旨を説明した上で支援の意向を伝えた。NPC 側からの具体的な要請があれば柔軟に対応する方針で臨んだが、当該年度中に明確な依頼はなかったため、支援の実施には至らなかった。

以上のように、令和6年度当初における支援対象国の選定は、国内外の情勢、トレーニング環境の困難性、NPC の対応可能性などを複合的に考慮し、事業の実効性と公益性の両面から判断を行ったものである。

6) 支援の条件

本事業では支援対象団体のアスリートが原則として以下の①から③の競技大会に出場することを条件とした。①から③の競技大会への出場機会が得られない場合においては、相手国政府や NPC からの書面での依頼が確認できるなど、スポーツ国際協力を通じて本邦のプレゼンス向上に資すると認められることを支援の条件とした。

2. 事業実施内容

本事業では、紛争等の国際および国内情勢により自国内で練習環境が整わない海外パラアスリート等に対し、短期間の日本国内での合宿やトレーニング環境を提供することを目的として事業を展開した。本事業においては、各国・地域のパラスポーツ全体を見渡し、多様なパラアスリートに包括的な支援を提供しているパラリンピック委員会（以下、NPC）を支援対象とした。対象NPCとの対話を通じて支援ニーズを把握し、可能な範囲でニーズに即した受入プログラムを設計・実施した。

具体的には、以下の3つのプログラムを展開した。

- 1) パレスチナ NPC 選手団受入プログラム
- 2) イエメン NPC・レバノン NPC 選手団受入プログラム
- 3) アフガニスタン NPC 選手団受入プログラム

これら3つのプログラムの概要を表3にまとめた。それぞれの内容については、以降に個別の活動報告を記載し、最後に全体としての総括を行う。

表3 本事業にて実施した3つのプログラムの概要

NPC	パレスチナ	イエメン・レバノン	アフガニスタン
受入期間	2024年10月10日～17日	2025年1月24日～31日	2025年2月8日～15日
受入人数	6名（選手2、コーチ2、PT1、NPC事務局長1）	6名（選手3、コーチ3）	3名（選手2、コーチ1）
対象競技	<ul style="list-style-type: none"> ・ 陸上 ・ 卓球 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 陸上 	<ul style="list-style-type: none"> ・ テコンドー
実施場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名古屋市 ・ 横浜（日本体育大学） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名護市 ・ 東京（日本体育大学） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京（日本体育大学、大東文化大学）
活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本体育大学陸上競技部パラブロック、卓球部学生との合同練習 ・ 日本体育大学ADスタッフ等による専門的セッション ・ 日本パラリンピック委員会によるNPCキャパシティビルディングセッション ・ ふりかえり、アクションプランニング 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本体育大学陸上競技部パラブロックとの合同合宿 ・ 日本パラリンピック委員会専任トレーナーによるセッション ・ ふりかえり、アクションプランニング 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本パラリンピック委員会ユースアスリート研修参加 ・ 大東文化大学テコンドー部との合同練習 ・ 日本体育大学教授による筋力トレーニングセッション ・ ふりかえり、アクションプランニング
交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名古屋市学校訪問（2校） ・ 愛知県知事、名古屋市長表敬訪問 ・ 愛知・名古屋2026 2年前イベント参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本体育大学和太鼓和太鼓同好会の演奏鑑賞、交流 ・ 日本パラリンピック委員会理事らとの会談 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本体育大学理事長表敬訪問 ・ 在アフガニスタン日本国大使館、日本アフガニスタン協会関係者との会談

1) パレスチナ NPC 選手団受入プログラム

ア. 受入プログラムの準備

パレスチナ NPC とのコミュニケーションは、パリパラリンピック期間中に開始された。日本パラリンピック委員会（JPC）強化スタッフとしてパリに滞在していた本事業責任者代理の伊藤が、JPC の外部アドバイザーである安岡氏の仲介により、選手村にてパレスチナ NPC の事務局長であるマムード・アシュマー氏と面談したことが端緒となった。

第 5 回アジアパラ競技大会（2026/ 愛知・名古屋）の 2 年前イベントが、2024 年 10 月 12 日（土）に名古屋市で開催される予定であったことを受け、同大会への参加意欲を高めることを目的に、この日程に合わせたトレーニングキャンプを計画した。さらに、スポーツ庁を通じて愛知県および名古屋市と協議を行い、2 年前イベントに加えて、特別支援学校や小学校での交流活動も企画した。また、日本体育大学（以下、本学）の学年暦において、10 月 14 日からの 1 週間がメディア授業期間にあたり、比較的トレーニング会場や人的リソースの確保が容易であったことも受入期間の決定に寄与した。

この計画をパレスチナ NPC に伝達し、来日可能な選手等の選考を依頼した結果、陸上競技の男性選手 1 名・女性選手 1 名、卓球競技の男性選手 1 名に加え、複数競技のコーチングを担当することが期待される男性コーチ 1 名、女性理学療法士 1 名、そして NPC 事務局長の合計 6 名が招へい候補として提示された。

その後、陸上競技の女性選手について、居住地の情勢悪化により来日が困難であるとの連絡が入った。当該選手は母親と生活を共にしており、来日中に母親に何かあった場合や、情勢悪化による帰国困難のリスクを懸念しての判断であった。本学およびスポーツ庁では母親を帯同させる可能性についても協議し、同選手にも提案したが、母親の健康状態から長距離の移動が困難であるとの理由で、この案も断念された。

このような経緯を経て、パレスチナ NPC からは女性選手の代替として女性の水泳コーチを派遣メンバーに加えたなどの要望があった。これは将来的に水泳を NPC のプログラムに加える意図に基づいたものであり、その趣旨を確認のうえ、水泳コーチを選手団に含めることとした。結果として、最終的に来日したのは、後述の一覧（表 5）に示すとおり、計 6 名となった。

日本国査証の取得については、イスラエル国内におけるパレスチナ人の移動制限により困難が予想された。しかし、選手団のリーダーでもある NPC 事務局長は、選手がテルアビブに移動せずに査証を取得する手続きについて十分に把握しており、「問題ない」と自信を持って説明していた。実際、査証の取得手続きは想定よりも円滑に進み、スムーズに来日準備が整った。

パレスチナ NPC の招へい準備における最大の課題は、スケジュールの逼迫であった。事務局長がパリパラリンピックからパレスチナへ帰国したのが 9 月 13 日であり、招へい予定日までわずか 26 日という短期間で準備を進める必要があった。情勢不安定な地域において日本国査証を取得し、航空券を手配して渡航することは極めて困難なプロセスである。今回の選手団は全員がウエストバンク地域に居住しており、テルアビブへの移動ができないため、渡航には全員が朝 9 時にヨルダンとの国境の町に集合し、ヨルダン川を越えてアンマン空港へ 4～5 時間かけて移動するというルートを取らざるを得なかった。

イ. 受入期間とスケジュール概要

パレスチナ NPC 選手団の来日スケジュールは、2024 年 10 月 10 日（木）から 10 月 17 日（木）までであった。来日期間中のスケジュール概要は表 4 に示す。

選手団は関西国際空港に到着し、事業コーディネーターである高野が空港で出迎えを行った。その後、新大阪を経由して名古屋に移動し、事業責任者代理の伊藤および通訳と合流した。10 月 11 日および 12 日は名古屋にて、愛知・名古屋 2026 2 年前イベントに関連する活動を実施した。

イベント終了後の 10 月 12 日夜、選手団は名古屋から横浜市へと移動した。以降は、本学横浜・健志台キャンパスにて実技トレーニングを実施するとともに、パレスチナ NPC の要望に応じた各種研修を行った。また、10 月 13 日には東京のオリンピックミュージアムを見学し、新国立競技場で開催されていた陸上競技大会の観戦・観察を行った。

10月17日には来日トレーニングキャンプ全体の振り返りを実施し、今後のアクションプランについて議論した後、羽田空港より帰国の途に就いた。

各活動の詳細については、項目ごとに後述する。

表4 パレスチナ NPC 選手団のスケジュール概要

活動日		内容
10/10	PM	関西国際空港に入国、名古屋市に移動
10/11	AM	名古屋市市長表敬訪問、名古屋市特別支援学校訪問
	PM	中小田井小学校訪問、愛知県知事表敬訪問
10/12	AM	愛知・名古屋 2026 2 年前イベント参加
	PM	イベント参加後、横浜市に移動
10/13	AM	11:00～移動
	PM	オリンピックミュージアム見学、NAGASE カップ観察
10/14	AM	体力測定
	PM	実技トレーニング（スキルチェック等）
10/15	AM	実技トレーニング
	PM	NPC キャパシティビルディング、ジム（S&C）トレーニング
10/16	AM	スポーツ栄養セッション（座学）
	PM	実技トレーニング、NPC キャパシティビルディング
10/17	AM	実技トレーニング
	PM	ふりかえり、アクションプランニング、羽田空港から出国

ウ. パレスチナ NPC 選手団の構成

準備段階の説明にて、選手選考の過程について記載した。当初予定していた陸上競技の女子選手が来日を断念し、その代替りとして今後パレスチナ NPC として開発した領域である水泳のコーチを受け入れることにした（表4）。

表5 パレスチナ NPC 選手団の名簿

氏名	性別	年齢	役割
ヤザン・ハンノン	男	29	選手（競技：陸上、クラス：T35）
アタラー・アルハイク	男	39	選手（競技：卓球、クラス：8）
モハメッド・カンファー	男	42	コーチ（競技：全般）
アマンダ・ムアレム	女	26	コーチ（競技：水泳）
アビール・アブドゥルカリム	女	26	理学療法士
マハムード・アシュマー	男	35	パラリンピック委員会事務局長

エ. 活動内容の詳細

a. 来日

選手団はまず関西国際空港に到着し、入国した。関西国際空港には事業コーディネーターの高野が赴き、出迎えを行った。その後、新大阪を経由して名古屋へ移動し、名古屋駅の改札出口にて事業責任者代理の伊藤および通訳と合流したのは、10月10日（木）の21時頃であった。

宿泊先のホテルは徒歩圏内にあったが、障がいのある選手等が大きな荷物を持って移動するのは容易ではなかった。健常者であれば5分程度で到着する距離であったが、実際には15分ほどかかった。チェックイン後は、近隣のコンビニエンスストアへ案内し、夕食の調達を行った。その際、選手らがどのような食事を摂取可能かについての確認も行った。事前の情報では6名全員がハラルフードを希望しているとされていたが、実際には6名中2名がキリスト教徒であり、食事に特別な制限はないことが判明した。

b. 名古屋初日（10月11日）の活動

翌日の10月11日（金）から、早速本格的な活動を開始した。朝9時20分、愛知県が手配した公用車2台に分乗し、名古屋市庁舎へと移動し、河村名古屋市長を表敬訪問した。河村市長からは選手団に対して歓迎の言葉が述べられるとともに、名古屋市の戦後復興とその後の発展について触れ、パレスチナの復興を願う言葉がかけられた。また、市庁舎では市職員による歓迎も非常に温かく、移動で疲れていたはずの選手たちも終始笑顔で過ごしていた。その後、名古屋市特別支援学校を訪問した。生徒たちが待つ体育館の入り口に到着すると、まず目に飛び込んできたのは、手作りの垂れ幕や飾り付けだった。そこからは、生徒たちが心を込めて準備してくれたことが伝わってきた。アラビア語で歓迎の言葉が一文字一文字丁寧に手書きされており、それを見た選手たちの顔には自然と笑顔が浮かんだ。その中の一文字が上下逆になっていたことも、彼らの心を和ませた。

カーテンが開いて体育館に入ると、子どもたちや教員、介助者らが体育館の両サイドに分かれて並び、選手たちのための花道を作ってくれていた。大きな拍手が湧き上がり、温かい歓迎を全身で感じながら、選手たちは笑顔で手を振りつつ、体育館前方に用意された場所へと進んでいった。

選手の紹介が行われた後、子どもたちとの交流へと移った。何人かの子どもたちが前に出て、パレスチナのヤザン



河村名古屋市長 表敬訪問



名古屋市特別支援学校での交流

選手とのかけっこに挑んだ。知的障がいと麻痺を抱えるヤザン選手を中央に、その両側に子どもたちが並んだ。「レディ・セット・ゴー！」という先生の合図とともに、体育館の後方に向かって一斉にスタートした。ヤザン選手は周囲の子どもたちを見渡しなが、にこやかに楽しそうに走っていた。観客席からは歓声が上がった。

ゴール後、ヤザン選手はさらに印象的な行動を見せた。声援を送ってくれた子どもたちのもとへ駆け寄り、体育館後方から前方へと、並んでいる子どもたちと次々にハイタッチを交わしながら駆け抜けていった。それだけでなく、反対側に並んでいた子どもたちの列にも向かい、今度は前から後ろへと同じようにハイタッチをしながら走り、場を一層盛り上げた。事前の打ち合わせもなく、その場の雰囲気を自然に感じ取り、声援への感謝を表すことができたヤザン選手について、帯同していたJPCの安岡氏は「このようなことが自然にできるヤザン選手は素晴らしい」と評していた。

次に行われたのは卓球でアタラー選手が教員とラリーを繰り返した。その後、「フロアリング」へと進んだ。これは氷の上で行うカーリングを模したフロア版の競技である。体育館を4つのエリアに分け、選手団も4つのグループに分かれて参加した。ポイントを示すシートが敷かれ、スローラインも設定された。ルール説明の後、子どもたちとパレスチナの選手たちは一緒に練習を始めた。子どもたちは笑顔で積極的に話しかけ、一生懸命にルールやゲームのやり方を教えようとしていた。選手たちもそれに応え、初めて体験するゲームを真剣に楽しんでいた。

ゲーム終了後、選手たちはそれぞれ教室へ移動し、子どもたちと一緒に、事業で準備したハラル弁当をいただいた。廊下を歩く際も、子どもたちや教職員が笑顔で声をかけてくれ、選手たちも喜びの表情を見せていた。教室に入ると中からは歓迎の歓声が響いてきており、その雰囲気に包まれて昼食をともにした。

昼食後、次の交流先である中小田井小学校へ車で移動した。この時点で、水泳コーチの体調が優れなくなり、ホテ



中小田井小学校での交流

ルへ戻す対応を取った。同行していた理学療法士によれば、飛行機内のエアコンが喉に悪影響を及ぼした可能性があるとのことだった。自身も機内の乾燥や冷気によって体調を崩さないよう気をつけていたという。水泳コーチは翌日のイベント時も不調が続いたものの、その後徐々に回復し、横浜に移動した後のトレーニングには問題なく参加していた。

中小田井小学校では、5年生の児童たちが総合的な学習の時間に福祉について学んでおり、その一環として、障がい者教育や障がい者スポーツについて、パレスチナの状況を踏まえた紹介を通じて学びを深めたいという意向が示されていた。こうした学習の流れに基づき、5年生を中心とした児童を対象に、集会での質疑応答と、体育館および校庭での運動遊びが実施された。

集会では、5年生の児童が司会進行を務め、選手に対してさまざまな質問が投げかけられた。選手たちも笑顔で丁寧に応答し、会場は温かい雰囲気になっていった。その後の運動遊びは、体育館と校庭に分かれて行われた。一方のグループでは、選手たちがパレスチナの子どもたちが行う遊びを紹介し、もう一方では、児童たちが日本の遊びとして鬼ごっこを紹介した。互いに紹介した遊びに共通点が多いことに、選手たちも児童たちも気づき、文化を越えた親近感が育まれていた。

校庭で行われた鬼ごっこでは、足に麻痺のある選手が夢中になって走り続ける様子が見られた。疲労の蓄積が見取れたため、事業責任者代理の伊藤が、適切なタイミングで休止を促す場面もあった。選手たちは終始、子どもたちとのふれあいを心から楽しんでいた。

全体として交流は和やかに進行したものの、我々から小学校への働きかけのあり方については、改善の余地があると感じた。パレスチナ NPC 選手団の来日が決定してから交流実施までの期間が短く、十分な準備時間を確保するこ



大村愛知県知事 表敬訪問

とができなかった。事業計画上では、パラリンピックの価値や共生社会の実現を目指すパラリンピックムーブメントの理解促進を目的とした、IPCが開発した教材「I'mPOSSIBLE」(日本語版)の活用を想定していたが、今回は中小田井小学校において活用することができなかった。それもあってか、質疑応答の場面で行われていた質問は「好きな食べ物は何ですか」といった、やや一般的なものが多かった。もちろん、学校側の主体的な取り組みを尊重することが基本である。しかし、共にイベントを創り上げるパートナーとして、事業の意義を丁寧に伝え、より密な連携と協働のもとで、より効果的なプログラムとなるよう計画を進める姿勢の重要性を改めて認識する機会となった。

学校訪問での子どもたちとの交流を終えた後、選手団は大村愛知県知事への表敬訪問に向かった。公邸へ向かう道中では、名古屋城を望む堀端沿いの道を通り、その美しい景観に選手たちは感激している様子であった。

公邸で行われた表敬訪問では、知事から温かい歓迎の言葉が述べられ、選手団代表のマハムード氏から知事へ記念品が手渡された。その後、屋内での歓談に加えて、公邸内の日本庭園においても集合写真の撮影が行われるなど、終始和やかな雰囲気の中で訪問は進行した。

この県知事表敬訪問をもって、名古屋での1日目の多忙なスケジュールは締めくくられた。

c. 名古屋2日目(10月12日)の活動

名古屋での2日目の活動は、「愛知・名古屋2026 2年前イベント」への参加が主なものであった。選手団は朝にホテルをチェックアウトし、すべての荷物を持ってタクシー3台に分乗してイベント会場へと向かった。

会場となったのは、熱田にあるイオンモールの駐車場で、仮設のイベントスペースとして整えられていた。敷地内にはトレーラーステージが設置され、その前には約60脚の折りたたみ椅子が並べられていた。選手団は、ステージ裏に設けられたテントの控え室に案内され、イベント運営担当者より当日の進行について説明を受けた。強い日差しの中、選手たちは控え室のテント内で出番を待っていた。

その間、会場には河村名古屋市長、森JPC会長、河合JPC委員長らが来場し、選手団と挨拶を交わした。選手団は、「第5回アジアパラ競技大会(2026/愛知・名古屋)を目指すアスリート」として紹介され、壇上に登壇した。また、



「愛知・名古屋 2026 2 年前イベント」への参加

パラ柔道日本代表の廣瀬氏とのトークショーにも登壇し、来日直後で疲労がある中でも笑顔を絶やさず、イベントに協力していた。

すべての出演を終えた後、選手団は再びタクシーに分乗し、荷物を持って名古屋駅へと向かった。予定どおり新幹線に乗り、新横浜駅まで移動した。選手たちには大きな荷物があることから、通常の座席スペースでは対応が難しいと判断し、事前に JR 東海に依頼して車両後部の荷物置き場を確保しておいた。新横浜駅に到着後、選手団は横浜線に乗り換えて長津田へ、さらに田園都市線にて青葉台駅まで移動した。青葉台駅から宿泊先のホテルまでは、健常者であれば徒歩 3 分程度の距離であるが、障がいのある選手団にとっては 10 分以上の移動を要していた。

d. アクティブレスト日（10月13日）の活動

選手団の移動による疲労を考慮し、10月13日はアクティブレスト日として設定した。午前11時に移動を開始し、田園都市線の青葉台駅へと向かった。東京都新宿区にあるオリンピックミュージアムの最寄り駅である外苑前駅まで電車で移動し、そこから徒歩で日本オリンピックミュージアムへと足を運んだ。国際競技大会への出場を目指す選手団にとって、オリンピック・パラリンピックの歴史等に触れ、これら大会について理解を深めることは、帰国後もより具体的に将来の国際競技大会への出場や活躍をイメージしながらトレーニング等に取り組むことに繋がり、本事業の趣旨・目的に合致する。こういった背景から、日本人スタッフ帯同のもと、本ミュージアムへ訪問した。

事前にミュージアム側には見学の希望を伝えており、到着時には案内担当の職員が丁寧に迎えてくれた。選手たちは展示を一通り見学した後、隣接する新国立競技場で開催されていた「NAGASE カップ」の観察へと向かった。NAGASE カップは、ワールドランキング対象競技会であり、世界パラ陸上競技連盟の公認大会でもある。一般社団法人日本パラ陸上競技連盟と公益財団法人東京陸上競技協会が主催するこの大会は、「日本陸連公認の部」と「パラ公認の部」の両方を備えた、誰もが参加できるインクルーシブな競技会として位置づけられている。もし準備期間に余裕があれば、ヤザン選手もエントリーできた可能性があり、実際に競技を行うには最適な大会であったと思われる。しかし、今回は準備期間が短く、エントリーが間に合わなかったため、観戦のみの対応となった。



オリンピックミュージアム（左）と新国立競技場でのNAGASE カップ（右）

グラウンドに近いエリアに座りながら競技を眺めていたヤザン選手に、「あなたがここで競技していたら、どんな気持ちになると思う？」と声をかけると、彼は表情を引き締めて「とても緊張すると思う」と答えた。それ以降、彼の観戦の姿勢には明らかな変化が見られ、より集中した様子で競技を見つめていた。ちょうどそのとき、大会に参加していた日本体育大学陸上競技部パラアスリートブロックの水野監督が、私たちのもとを訪れてくれた。そしてそのまま、選手団をグラウンドレベルまで案内してくれた。この配慮により、ヤザン選手にとって競技がさらに身近に感じられる貴重な機会となったと考えられる。

これらの活動を終えた後、一行は新国立競技場を後にし、東京体育館の敷地を抜けて千駄ヶ谷駅へと向かった。中央線で代々木駅まで移動し、山手線に乗り換えて渋谷駅へと向かった。渋谷では、選手たちの希望を尊重し、リラックスの時間も兼ねて、彼らが訪れたがっていた渋谷 PARCO 内のポケモンセンターや任天堂ショップなどを案内した。その後、夕食は渋谷駅近くのハラル対応の飲食店にてとることとした。

ところが、夕食の直前になって、選手団の一人が「自分はこの食事には参加しない」と言い出す場面があった。原因は、店の席が「お座敷席」であったため、靴を脱いであがることに抵抗感を抱いたことにあったようだった。この状況に対して、同行していた選手団のリーダー（NPC 役員）に、NPC 内で解決を図るよう依頼した。その後、リーダーの丁寧な働きかけにより、最終的には全員が揃って夕食をともにすることができた。

長い一日であったが、選手たちは心理的にはリラックスできたのではないかと考えている。またこの日は、選手団への帯同を事業コーディネーターの高野、事業責任者代理の伊藤だけでなく、本学オリンピック研究所の関口助教や中東に滞在経験があり中東の体育教育を研究している博士後期課程の馬場氏がともに選手団の引率を担当してくれたこともあり、個別のニーズに応えるような対応が可能となった。

e. 日本体育大学でのトレーニング1日目（10月14日）

日本体育大学横浜・健志台キャンパスにおける本格的なトレーニングが始まった。ホテルから青葉台駅までは徒歩で移動し、そこからバスに乗ってキャンパスへ向かった。

この期間のトレーニングプログラムは、先方からの依頼により、事業側で立案することとなっていた。選手らの動作に関する映像は事前に送られてきていたものの、詳細な情報は乏しかったため、それぞれの能力を把握する目的で、午前中に体力測定を実施することとした。

測定開始に先立ち、帯同していた2名のコーチおよびPTに対し、これから基礎的な体力測定を行うことを踏まえたウォームアップを実施するよう依頼した。コーチらの指導の様子を観察したところ、ウォームアップは円滑に進められており、基本的な指導スキルが備わっていることが確認できた。

体力測定は、本学ハイパフォーマンスセンターの谷口助教が担当した。日頃より本学のトップアスリートに対して測定を行っているスタッフであり、手際よく測定が進んでいった。測定項目は、身体組成、握力、長座体前屈、リバウンドジャンプ、上体起こし、ボール投げ、反復横跳び、30m 走であった。選手やコーチたちは、各項目の測定値

を興味深そうに観察し、特に身体組成に関するデータについては、担当の専門家と積極的に意見交換を行っていた。なかでもチームリーダーのマムード氏とPTのアビール氏に対しては、測定の目的や内容に関する詳細な説明を行った。

午後には、ヤザン選手は陸上競技場にて、アタラー選手は体育館にて、それぞれ専門種目の実技トレーニングを行った。先述のとおり、パレスチナ NPC 選手団からはトレーニングメニューの設計について本学側に一任したいという依頼があった。そのため、トレーニング 1 日目の午後は、支援を担当する本学スタッフが選手の現状を把握することを目的に、スキルチェック等を実施した。

ヤザン選手に対しては、本学副学長であり陸上短距離指導を専門とする事業責任者の水野増彦教授と、陸上競技部パラアスリートブロックの水野洋子監督が中心となって指導にあたった。また、パラリンピック銅メダリストの辻沙絵選手と銀メダリストの福永凌太選手もトレーニングに参加し、協力してくれた。

モハメッドコーチについては、NPC 全体のコーチングを統括する役割を担っていると聞いていたが、今回は特にヤザン選手の陸上競技指導に重点的に関与してもらった。理学療法士のアビールには、選手の動きを観察・理解することを目的に、この日はヤザン選手に付き添ってもらった。

ウォームアップでは、ウォーキング、ジョギング、静的ストレッチ、ウォームアップドリル、ダイナミックストレッチなどを実施したが、この時点で既に息が上がる様子が見られた。障がいの影響もあり、全身のコーディネーションに課題が見られたため、それらを改善するトレーニングも必要であると考えられた。ウォームアップ後は、走姿勢の確認を行い、ミニハードル走やスタート練習（スターティングブロックを用いないスタンディングスタート）を実施した。その後、100m のタイムトライアル走を行い、タイムは 19 秒 54 であった。

卓球のアタラー選手に関しては、体育科教育学が専門の寺岡助教およびヒッティングパートナーとして協力していた体育学部 1 年の市江氏に加え、知的障がい者卓球ナショナルチームのコーチである森美紗樹氏（スポーツ庁委託事業「女性エリートコーチ育成プログラム」受講者）が協力を駆けつけた。アタラー選手と合わせた 4 名でディスカッションを行い、強みや弱みを洗い出し、今後どのようなトレーニングが必要かを整理していった。

ウォーミングアップのラリーでは、久しぶりの実戦練習であったこともあり、アタラー選手は感覚を確かめるような動きを見せていた。空振りも多く、苛立ちを覗かせる場面も見られた。約 15 分のウォーミングアップの後、ス



体力測定（上 2 枚）とトレーニング 1 日目のスキルチェック（下 2 枚）

キルレベルを確認する目的でゲーム形式の練習を行った。この際、市江氏には多様なボールを回してもらい、アタラー選手がそれにどう対応するかを観察した。ゲームスコアは3-11、4-11であった。この2ゲームの結果を踏まえ、15分程度のディスカッションを行い、強みと課題を話し合いながら書き出した。強みとしては、フォアハンド、ディフェンス、ショートサーブのレシーブが挙げられ、課題としては、相手の回転への対応、ラリー中の短いボールへの対応、立ち位置、ロングサーブのレシーブが指摘された。

その後、サーブレシーブの課題を深掘りするために、サーブレシーブの練習を実施した。市江氏が様々な種類のサーブを出し、アタラー選手の反応を見ながら課題を探っていった。その結果、ロングサーブかつ強い回転がかかっているサーブのレシーブが特に苦手であることが明らかとなった。続いて、レシーブからのラリーを中心とした練習に移行し、打点の修正、スタンス、重心位置の置き方など、複数の具体的な課題を抽出することができた。

すべてのトレーニング終了後には、全員が教室に集まり、一日の振り返りを行った後、それぞれ帰途についた。

f. 日本体育大学でのトレーニング 2 日目（10月15日）

午前中は、陸上競技と卓球の2種目に分かれて実技トレーニングを実施した。二手に分かれる前に、伊藤事業責任者代理より6名それぞれに課題が提示された。チームリーダーであるマハムードには、NPCチーム全体をシステムとして捉え、マネジメント能力の向上に取り組むこと、モハメッドコーチには、陸上競技短距離に関するテクニクやコーチング方法を水野教授や水野監督らから学ぶこと、アマンダコーチには、陸上・卓球の専門ではない立場から、競技を問わず重要となるコミュニケーションスキルの向上に努めること、アビールPTには、選手のコンディションを正確に把握しつつ競技理解を深め、将来的にNPCのトレーナーとしての役割を果たせるよう知識と経験を積むこと、ヤザン選手とアタラー選手には、それぞれの競技スキル向上に主体的に取り組むことが伝えられた。

陸上競技のトレーニングには、本学陸上競技部パラアスリートブロックの7名が参加し、補助として協力した。指導は、前日と同様に水野増彦教授と水野洋子監督が担当し、モハメッドコーチおよび競泳コーチであるアマンダも加わった。アマンダには、前日と同様に、競技を超えてコーチとして必要なコミュニケーション能力に焦点を当てて関与するように指示していた。

学生アスリートとの自己紹介を終えた後、ウォームアップとPNFストレッチングを行った。前日は水野増彦教授と水野洋子監督の両名がヤザン選手に声をかけていたが、この日は知的障がいのあるヤザン選手への情報の過多を避けるため、声かけを水野増彦教授のみに統一した。また、前日からの変更点として、モハメッドコーチがヤザン選手の指導に直接関わる形をとった。アマンダコーチは、水野教授の指示を英語からアラビア語へ必要に応じて通訳し、モハメッドコーチに伝えるとともに、ヤザン選手への声かけも行った。

トレーニングでは、股関節の可動域拡大と走フォームの改善を目的にハードルを用いたドリルを行い、ヤザン選手が一人でも継続できるような内容とした。続けて、得た動きを実際のスプリントへとつなげるため、マーク走を導入



パラアスリートブロックの選手たちと（10/15）



アマンダコーチは競泳の練習観察（10/15）

した。マークはスタートから 10m 地点を基点に、その後 160cm 間隔で 10 個配置した。JAL 所属で本学卒業生の鈴木雄大選手がガイドとして並走し、狙ったトレーニング刺激が得られるよう調整を加えた。最後にはマークなしでのスプリントも実施し、フォームの定着を図った。

一方、卓球のアタラー選手には、前日と同様に寺岡助教およびヒッティングパートナーの市江氏が対応した。前日に明らかになった課題を踏まえ、アタラー選手と相談しながら練習内容を組み立て、パターン練習を経てラリー練習へと展開した。その後、ゲーム形式の練習を 3 ゲーム実施し、スコアは 1-11、4-11、6-11 であった。ゲーム中に見られた課題についてディスカッションを行い、最後にその課題を意識しながらラリー練習を実施した。

この日の午後には、日本パラリンピック委員会の安岡氏の協力のもと、NPC キャンパシティビルディングを実施した。参加したのは、NPC 事務局長のマハムード、理学療法士のアビール、陸上コーチのモハメッドの 3 名であった。このセッションでは、「なぜパレスチナに NPC が必要なのか」「現在パレスチナ NPC にあるもの」「今後整備していくべきもの」などを整理する作業が中心となった。

キャンパシティビルディングと同時刻に、競泳コーチのアマンダを本学水泳部の競泳ブロック練習の観察に引率した。ここでは、オリンピックでもある本学の清水咲子助教（監督）が対応してくれた。アマンダは、ウォームアップや各種メニューを観察し、清水監督とのディスカッションも行ったが、終了後、「パラ水泳について知りたかったのに、健常者の練習ばかりで、自分が期待していた内容とは違った」という反応を示した。そこで、帯同していた伊藤事業責任者代理が、アマンダの課題意識を丁寧に整理しながら対話を行った。伊藤は、コーチとして重要なスキルには「他者に関する知識」と「自己に関する知識」があり、それらは障がいの有無を問わず本質的に共通していること、また、高いレベルでトレーニングを行っている本学の競泳チームの練習メニューやコーチの観点からも、学べることが多くあると説明した。しかし、その時点ではアマンダの不満が完全に解消されたとは言い難く、より良い学習機会を提供するため、急遽、伊藤の研究室でコーチング学を学んでいたパラ競泳のメダリスト・富田宇宙氏に連絡を取り、対話の時間を設けられるよう調整を進めた。

また、15 時 30 分から 17 時まで、選手たちはトレーニングセンターにて、本学のストレングス&コンディショニング（S&C）コーチである榎野氏から、マシーントレーニング、各種トレーニング器具を使ったエクササイズ、さらには自重を使ったトレーニングの指導を受けた。コーチたちも選手とともにトレーニングに参加しながら、選手に適した動作指導の方法について榎野氏から学んでいた。

この日のすべてのプログラム終了後、全員で一室に集まり、1 日の振り返りを行って締めくくった。その後、バスで青葉台駅に向かい、ホテルへと戻った。

g. 日本体育大学でのトレーニング 3 日目（10 月 16 日）

3 日目は、スポーツ栄養のセッションから始まった。担当したのは、本学アスレティックデパートメントに所属し、



清水咲子監督とアマンダコーチ（10/15）



榎野 S&C コーチのセッション（10/15）



栄養に関するセッション（10/16）



鄭教授による指導（10/16）

学生アスリートの栄養指導を行っている渡辺助教であった。セッションでは、食事の基礎や日常的な食生活の確認に加えて、補食の摂取方法についての情報提供が行われた。提供された情報を踏まえ、選手たちが現在どのような食生活を送っているのかを出発点に、効果的な補食のあり方について意見を交わしながら検討を進めた。また、試合日における食事の注意点や、本キャンプ終了後の帰国後における食事構成についても助言がなされた。

この日の実技トレーニングは午後実施された。ヤザン選手の陸上競技トレーニングは、ダイナミックストレッチやメディシンボールを用いたウォームアップから開始された。ダイナミックストレッチにおける動作には、1日目・2日目と比べてコーディネーションの改善が見られた。その後、階段を活用したドリルを実施し、膝を高く引き上げる意識を促した。ヤザン選手にはスプリント時につま先から接地してブレーキをかけてしまう癖が見られたため、これを改善する目的でドリルが構成された。水野教授が見本を示し、それを模倣する形でヤザン選手がトレーニングを進めるうちに、徐々に一人でも狙った動きを再現できるようになっていった。ただし、その際にも下腿部が内側に入り、つま先が地面方向を向く傾向が見られたため、理学療法士のアピールに対してその点を伝達し、引き続き膝を高く保ち、適切な動作を習得するようなトレーニングを継続するよう助言を行った。

この動作をさらに洗練させるため、バランスディスクを活用したトレーニングを行った。ヤザン選手は、両足であればバランスディスクの上に比較的容易に立つことができたが、片足での静止には他者の補助が必要であった。トレーニングは、まずディスク上に立つことから始まり、徐々に片足立ちで膝を高く上げた状態（階段ドリルで用いたハイニーの姿勢）を維持する練習へと発展した。最終的には、7つのバランスディスクを一直線に並べ、その上を歩行するトレーニングに取り組んだ。さらに難易度を上げるために、シャフトを肩に担いだ状態、または頭上に挙上した状態での歩行も実施した。

卓球においては、本学で卓球指導を専門とする鄭教授が指導に駆けつけてくれた。鄭教授は、これまでの練習において実戦的な内容が不足していること、またアタラー選手が自身の課題に対する練習を十分に行っていないことを指摘した。これに刺激を受けたアタラー選手は、指摘された技術に対して自発的に繰り返し取り組むようになった。それまでは課題を理解しながらもフリーラリーを好んで行っていた様子があり、課題解決型の繰り返し練習の習慣はあまり身につけていなかったようである。鄭教授の助言のもと、ドライブ・スマッシュ・ブロックなどのプレーをパターン化し、重点的な反復練習を行うことで、成功体験を積み重ねる機会が設けられた。また、新しいサーブも紹介され、身体の使い方やラケット操作についての具体的な指導が行われた。時には映像も活用され、理解の促進が図られた。さらに、状況を設定したラリー練習も実施され、サーブを相手にドライブで返された際の対応方法について繰り返し練習が行われた。練習後には鄭教授からフィードバックがなされ、アタラー選手からはラケットに関する質問があり、鄭教授が別の種類のラケットについて紹介する場面もあった。これを受け、アタラー選手は今後の新しいラケットの購入を検討することとなった。

また、この日も NPC 事務局長のマハムードに対して、JPC の安岡氏が再び大学を訪れ、NPC キャパシティビルディングを継続して実施された。NPC キャパシティビルディングという言葉が包括する範囲は広範にわたるため、安



富田宇宙選手、清水咲子監督との対談（10/17）



河野徳良准教授との情報交換（10/17）

岡氏はマハムード氏との話し合いを通じて、「アスリートを確実に国際大会に派遣できる知識と手続きを備えた組織」を目指すという焦点を設定し、研修の方向性を明確化した。その中では、国際パラリンピック委員会（IPC）およびアジアパラリンピック委員会（APC）の構造理解、クラス分け制度、国際大会へのエントリー方法などについて、丁寧に確認と指導が行われた。

h. 日本体育大学でのトレーニング4日目（10月17日）

トレーニング最終日となるこの日は、午前中に実技トレーニングを実施し、午後には全体の振り返りと今後のアクションプラン作成を行った。

2日目の午後に本学競泳部の練習を観察した際、健常者と障がい者のトレーニングやコーチングの共通点について、競泳コーチのアマンダに十分な理解が得られなかったことを受け、パリパラリンピックのメダリストである富田宇宙氏に横浜・健志台キャンパスまで来てもらい、アマンダとの対話の機会を設けた。アマンダを再びプールに引率し、富田氏がかつてトレーニングを行っていた場でもある同施設に案内した。このセッションには、理学療法士のアビールも同席した。

プールでは再び清水監督が対応にあたってくれたほか、本学大学院修士課程でコーチング学を学びながら実際に指導を行っている和田氏も参加し、パラ競泳に関する多角的な対話が可能となった。パラリンピアンとしての富田氏の発言は説得力に満ちており、「健常の競泳トレーニングもパラの競泳トレーニングも本質的には同じである」と明言し、



富田宇宙選手との記念撮影（10/17）

「自分自身もこのチームで健常者と同じメニューに取り組んできた」と語った。その言葉を受け、アマンドの表情が明らかに変化した。

さらに富田氏は、水中でのトレーニングに偏りがちなアマンドに対し、ドライランドトレーニング（陸上で行うトレーニング）の重要性を強調した。和田氏が具体的なドライランドトレーニングを実演すると、アマンドおよびアビールは熱心に映像に収めながら観察し、積極的に学ぼうとする姿勢を見せた。

アマンドからは、「両足を切断した選手を今後指導することになる予定だが、どのようにトレーニングすればよいか」との問いが出された。それに対して富田氏は、「基本的には健常者と同じように考えればよい。ただ、できない動作があれば、それに代わる方法を考えて実施するだけだ」と述べた。さらに、同様の障がいをもつ鈴木孝幸選手の映像をアマンドに見せ、鈴木選手が行っているトレーニングが実際に同じであることを説明した。加えて、東京2020パラリンピックに向けたスポーツ庁委託事業「戦略的二国間スポーツ国際貢献事業パラ参加国最大化事業」の際に作成されたドライランドトレーニング映像についても紹介がなされた。これは富田氏の協力のもと、鈴木孝幸選手や木村敬一選手らが出演したものであり、出演者の同意が得られればアマンドとアビールに共有することを約束した。その後、出演者らの同意が確認されたため、数週間後に映像が2人に共有された。

アビールPTは、清水監督および富田氏とのミーティングを終えた後、アスレティックトレーナーに関するセッションにも参加した。ここでは、日本代表野球チームのトレーナーを務める本学の河野徳良准教授が対応し、日本におけるアスレティックトレーナーの役割、歴史、資格制度の概要について丁寧に解説するとともに、本学におけるトレーナー養成の取り組みについても紹介した。さらに、アビールからパレスチナの事情を聞き取るなど、相互の情報交換が活発に行われた。

陸上競技では、トレーニングの指標となるコントロールテストを実施することとした。当初はコントロールテストの各項目を2回実施する予定であったが、ヤザン選手にかなりの疲労が見られたため、各1回の実施とするよう予定を変更した。ウォームアップとPNFストレッチングの後、テストを実施した。テスト項目は以下の5項目であった。

- (1) 30m 走
- (2) 100m 走
- (3) メディシンボール投げ（オーバースロー）
- (4) 片足立ち
- (5) 立ち幅跳び

テスト開始前には疲労を訴えていたものの、実際にテストが始まると、より良い記録を出したかったのか、2回の試行を行った。30m 走の記録は1回目が6"54、2回目が6"41であった。1回目はブレーキがかかってしまう走り方をしてきたため、これまで練習してきたハイニーを意識させるよう指導してから2回目の試技を行った。2回目は膝が高く上がり、走りのフォームも改善されていた。100m 走の記録は1回目が20"23、2回目が18"45であった。1回目は膝の高さが低く、ストライドが狭い走り方となっていた。本人は非常に悔しがっており、2回目の実施を希望したため、福永選手が並走して再挑戦することとした。ヤザン選手は膝を高く上げた走りができ、後半には腕の振りも改善されており、初日の19"54から1秒近くタイムを短縮することができた。

アタラー選手は、最初のウォームアップラリーの後、再度どのような練習が必要なのかをディスカッションした。その結果、左右の切り替えを行う練習を市江氏の球出しで行うこととした。初日よりコントロールが良くなり、フォアハンドのミスも減っていることが確認された。次に、前日鄭教授から教わったサーブの練習を行った。本人曰く「夢の中でも練習していた」とのことであった。

最後に課題を確認したうえで、ゲーム練習を実施した。そこでは以下のような課題が挙げられた。

- ドライブを打った後の打球の打点は早くする
- サーブは強弱だけでなく、コントロールを大切にす
- レシーブやネット際ボールの処理は足の位置を微調整し打点や角度を調整する
- スイングが下から上という癖があり、オーバーミスが多いので、ラケットヘッドをスイングするように修正する
- 相手の回転を見極める



アクションプランニングの様子（10/17）

最終日の午後のセッションは、全体の振り返りとアクションプランニングとした。特に、第5回アジアパラ競技大会（2026/愛知・名古屋）を念頭に置き、今回の来日キャンプで得た成果を踏まえ、今後必要となる行動を検討してもらった。このアクティビティは、マハムード氏とアマンドコーチ、ヤザン選手とモハメッドコーチ、アタラー選手とアビールPTのペアで進めた。

最初に設定された目標を確認したところ、目標設定とアクションプランの立て方に改善の余地があることが明らかとなった。具体的には、目標が抽象的であったり、非現実的であったりするために、実行可能なプロセスを計画できていなかった。ヤザン選手は「アジアパラ競技大会で金メダルを獲得する」と目標を掲げていたが、金メダルを取るために「何秒で走らなければならないか」という視点が抜けていた。またアタラー選手も同様にメダル獲得を目標にしていたが、実際には卓球競技では世界ツアーに参加してポイントを蓄積し、世界ランキングを上げなければ出場できないという前提を見落としていた。そこで、両者に前回大会の杭州アジアパラ競技大会の資料を提供し、出場条件を確認するよう促した。

このようにして、SMARTな目標設定とプランニングの重要性を伝えた。SMARTとはSpecific（具体的）、Measurable（評価可能）、Action-oriented（行動指向）、Realistic（現実的）、Timed（時間制限がある）の頭文字をとったものである。この説明の際、選手団から「I know」という言葉が返ってきたため、一言苦言を呈することとした。この言葉は今回の来日キャンプ中にも頻繁に耳にしたものであり、あえて『知っている』『理解している』というマインドでいると、学びがそこで止まってしまう。『I know』と言うのはやめよう。実際に皆さんが立てた目標や計画はSMARTではなかった」と伝えた。それ以降、参加者たちは謙虚な姿勢で自らの計画を見直すようになっていた。目標設定とアクションプラン作成を終えた後、それぞれのペアが全体に対して成果物の発表を行った。そして、マハムード氏より総評と挨拶があり、伊藤から今回のキャンプに参加した証として、参加証明書を授与して全てのスケジュールを終了した。

i. 帰国

横浜健志台キャンパスからタクシーで東急市が尾駅まで移動し、そこから空港バスに乗って羽田空港へ移動した。そこには本学の学生で事業を手伝ってくれた学生も駆けつけ、パレスチナ選手団を見送ってくれた。

オ. 招へい選手等のトレーニングに関する評価・課題等

a. アタラー・アルハイク（卓球）

アタラー選手は過去に国際大会への出場経験があり、自身でトレーニングを行うマインドを有していた。そのため、卓球経験があり教授法を専門とする寺岡助教がディスカッションファシリテーターとして帯同し、ヒッティングパートナーを務めた男子学生と共に、対話を通じてトレーニング内容を構築しながら練習を進めていくスタイルを主に採用した。ある1日には、本学卓球部の監督である鄭教授によって、より専門的な観点からの指導も行われた。アタラー選手はこれまで自己流で練習してきたようであるが、今回のキャンプを通じて、新たな練習法や考え方を得る機会となったと推察される。今後の強化においては、練習相手の確保が重要な課題となることが示唆された。

b. ヤザン・ハンノン（陸上）

脳性麻痺と知的障がい併せ持つヤザン選手は、非常に純粋なマインドでトレーニングに向き合う青年であった。スペシャルオリンピックスへの出場経験はあるものの、競技志向の強いパラリンピックへの挑戦は今回が初めてとなる。陸上競技の指導には、短距離を専門とする水野教授および陸上競技部パラアスリートブロックの水野洋子監督があたった。加えて、辻沙絵選手、福永凌太選手といったパラリンピックメダリストや、学生パラアスリートらもトレーニングに加わり、共に練習に取り組んでくれた。これらの支援は、ヤザン選手にとって非常に有意義なものとなったと考えられる。

ただし、これまで本格的なトレーニングの経験はほとんどなかったとみられ、基本的なトレーニングであっても大きな負荷となっている様子が観察された。そのため、水野教授および水野監督が事前に準備していたメニューは、状況に応じて大幅に削減・調整されることとなった。

こうしたトレーニングを通じて、ヤザン選手の100m走のパフォーマンスには改善が見られた。初日と最終日に実施した100m走のタイム計測では、初日の記録が19秒54であったのに対し、最終日には18秒45にまで向上した。しかし、彼の障がいクラスとして想定されるT35クラスのアジアパラ競技大会参加標準記録（MQS）は17秒であり、依然として1秒45の差がある。最終日にはこの点を明示し、今後1年間の目標としてMQS突破を目指したトレーニングプランを策定するよう、コーチ陣に働きかけた。

c. コーチ・リーダー育成

初日はアスリートのパフォーマンスを評価することに焦点をあてたが、2日目以降は各スタッフにも成長の課題を設定した。将来的にパレスチナのコーチ陣をリードする立場になると見込まれるモハメッドには、ヤザン選手に常に帯同し、陸上競技のスキル指導法を学ぶことをタスクとして与えた。水泳コーチのアマンダには「コミュニケーション」をテーマとして設定した。これは、彼女の専門である水泳の選手が今回の来日に含まれていなかったため、専門的な指導を直接学ぶ機会がなかったことが理由である。しかし、コーチに求められるコミュニケーションスキルは競技を問わず共通して重要であり、そのため、ヤザン選手およびアタラー選手の練習現場を行き来しながら、効果的なコミュニケーションのあり方について考察することを求めた。

理学療法士のアビールには、身体機能に関する専門知識を活かし、両選手の練習に参加しながら、専門的観点から動作の分析と改善方法の検討を行うタスクを課した。NPC事務局長であり、今回の選手団のリーダーでもあるマハムードには、リーダーシップ、チームビルディング、コーチ育成といったテーマでの学習課題を提示した。それぞれのスタッフが自身の立場から学びを進めていった。

アマンダには、コミュニケーションに加えて競泳のコーチングに関する学びも深めてもらうべく、本学水泳部の協力のもと、競泳練習の観察機会を提供した。しかし、彼女は「自分はパラの競泳を学びたい」との意識が強く、健常者の練習からは学びが得られないという反応を示していた。これに対して伊藤より、学びに対する姿勢の重要性について働きかけを行った。

最終日には、本学大学院修了者でありパラリンピックのメダリストでもある富田宇宙氏がキャンパスに来訪し、清水咲子監督（本学助教）とともに「パラ競泳もオリンピック競技としての競泳も本質的には同じである」と語ってくれた。その言葉は、アマンダの姿勢にも変化をもたらしたように見受けられた。対話の中では、プール内でのトレーニングに加えて、ドライランド（プール外）トレーニングの重要性についても言及があり、大学院生でコーチング学を学びながら指導にあたっている和田氏がデモンストレーションを行った。アマンダやアビールはそれを映像に収めるなど、積極的に学ぶ姿勢を示していた。実際のパラアスリート、特にメダリストの言葉には、大きな影響力があったと考えられる。

アビールに対しては、最終日に本学のアスレティックトレーナー（AT）である河野徳良准教授との対談機会を設けた。日本のトップレベルのATとして長年活躍してきた河野准教授の話や、彼が指導する学生トレーナー団体の活動を見学したことは、アビールにとっても新たな知見となったはずである。

トレーニングキャンプの締めくくりとして実施したアクションプラン作成においても、プランの策定および実行に関しては今後も継続的な支援が必要であることが、成果物やその作成過程から明らかになった。実際に第5回アジアパラ競技大会（2026/愛知・名古屋）に出場するためには、引き続き段階的な支援が求められると判断された。

カ. 全体を通した振り返り

a. 運営

事業目的の達成に向けた活動は、概ね十分に行えたと評価している。事業契約の締結から実施までの準備期間が極めて短かったことが最大の制約要因であり、それに伴ってパレスチナ NPC の対応力の不透明さも、本事業の成功に向けた大きな不安要素であった。しかし、軽微な課題はあったものの、目的としていた活動をすべて滞りなく終えることができた点は、何よりも大きな成果である。

今回の受け入れは本事業の最初のタスクであり、事業を受託した日本体育大学のチームが、各国選手団を受け入れる際にどの程度のパフォーマンスを発揮できるかを測る機会ともなった。10月14日以降に実施した日体大横浜・健志台キャンパスでのトレーニングキャンプでは、陸上競技部、卓球部、水泳部などの協力を得ながら、参加者のニーズに応じた柔軟な運営を行うことができた点が、一つの成功要因であったと分析している。

ただし、この成功の背景には留意すべき点もある。それは、当該期間が大学のメディア授業期間と重なっており、通常授業が実施されていなかったために、施設を比較的自由に使用できたこと、ならびに教職員・学生の配置が容易であったことである。仮に通常授業期間中であれば、施設や人員の確保がより困難となる可能性が高かったと推察される。

b. 食事

宗教的な理由からハラルフードの提供が必要であり、日本国内ではその選択肢が限られているため、事前の準備が求められた。キャンプ中の昼食については、本学に入っている業者の協力により滞りなく提供できたが、朝食および夕食に関しては、レストランやコンビニエンスストアで各自に選んでもらう方法をとった。このような対応をとった背景には、事前調査において全員がハラルフードを希望するとの回答があったことがある。しかし、実際には選手団6名のうち2名はキリスト教徒であり、特に食事に関する制限はなかった。また、準備した昼食に手をつけられない場面も一部に見られたが、それは宗教的理由というよりも嗜好の問題によるものであったと考えられる。

c. 休日・自由時間

選手団の受け入れに際しては、休日の設定や自由時間の過ごし方に関して、対応を検討する場面が多く見られた。選手団には、トレーニングや学習活動以外にも日本滞在中に希望する活動が多くあり、それらへの対応方法は今後の検討課題である。

事前に、日本の法令を遵守し、事業運営スタッフの指示に従う旨の誓約書に NPC 会長の署名を得ていたものの、来日後は買い物などの私的な希望が複数の場面で選手等からスタッフに伝えられた。通信手段としてポケット Wi-Fi を用意し、常時連絡が取れる体制は整えていたが、自由行動の範囲や制限について、事前に運営側で方針を明確化し、共有しておく必要性を感じた。

キ. 帰国後のフォローアップ

帰国後も日本でのキャンプの成果を活かすために、オンラインでのフォローアップを継続することを伝えていた。帰国直後には、アマダコーチとアビール PT が今後の活動についてのミーティングを行い、その様子を報告してくれた。富田宇宙選手との対話の中で話題となった、パラ競泳選手によるドライランドトレーニング映像のリクエストがあり、出演している富田選手、木村選手、鈴木選手の同意を得た上で、該当の映像を共有した。これにより、過去に我々のチームが実施していたスポーツ庁委託事業「戦略的・二国間スポーツ国際貢献事業（パラ参加国最大化事業）」で得られたリソースを、今回の事業にも活用することができた。

モハメッドコーチ、アマダコーチ、アタラー選手からは、本学でのキャンプ中に撮影していたトレーニング風景の映像等の共有依頼があり、それにも適切に対応した。NPC 事務局長のマハムード氏からは、選手やコーチの発掘に関する動向報告が継続的に寄せられている。特にアマダコーチの専門種目である水泳においては、新たな選手が発掘され、本学で得られた知見を基にトレーニングが開始されたという報告も受けている。

アビール PT からは、パラアスリートに特化した医学的知識を深めるための手段について相談があり、クラス分けの重要性を改めて伝えるとともに、IPC が提供するクラス分けに関する研修等の受講を推奨した。これにより、アビール PT が求める障害特性に応じた医学的知識の獲得が可能になると考えられる。また、NPC 内にクラス分けの知識を有する人材が存在することは、将来的な選手発掘や育成にも大きな意義を持つと期待される。今後は、具体的な提案ができるよう、事業側でも IPC 等の研修コースの調査・検討を進めていく予定である。

ヤザン選手からも、トレーニングの様子を収めた映像を始め、様々な情報が共有されている。映像にはウェイトトレーニングやランニングの様子などが含まれており、継続的にトレーニングに取り組んでいることが確認できる。2025 年 3 月にはイタリアで開催された冬季スペシャルオリンピックスにも参加し、雪上でのランニングイベントに出場。表彰台で満面の笑みを浮かべながらメダルを受け取る様子も共有された。

アタラー選手はキャンプ終了後、一度パレスチナに帰国したのち、アメリカ在住の兄弟のもとを訪れているという情報が入っている。日本でのトレーニング中に鄭教授とのディスカッションを通じて新しいラケットの購入を検討するようになったが、パレスチナでは入手が困難なことから、アメリカ滞在中に調達を目指しているとのことであった。渡航後 1 か月程度が経過した時点で連絡を取ったところ、まだ購入には至っていないとのことであったが、4 月初旬に帰国する予定とのことであり、それまでに入手できることを期待している。

本事業は年度末をもって終了となるが、引き続き、パレスチナ NPC が必要とし、本学で対応可能な支援については、可能な範囲で継続していく方針である。



ヤザン選手から送られてきた写真の例（左：トレーニング中、右：スペシャルオリンピックスでの写真）

2) イエメン NPC・レバノン NPC 選手団受入プログラム

ア. 受入プログラムの準備

a. イエメン

イエメン NPC 選手団の受入に向けた準備は、2024年11月8日に Amal 氏が「NPC YEM for Aichi-Nagoya2026AG」というグループチャットを立ち上げたことにより開始された。この場で、安岡由恵氏が JPC の立場から初動の対話を担い、イエメン側との接点づくりを行った。同日、Saif 氏が歓迎の意を表し、選手団の選考プロセスについての議論が始まった。

11月22日には、高野事業コーディネーターが自己紹介を行い、選手情報の収集を開始した。あわせて、イエメンの現状や第5回アジアパラ競技大会（2026/愛知・名古屋）に向けた課題について意見交換が行われた。この中で、Saif 氏から、イエメン国内では日本ビザの取得が困難であるため、周辺国（エジプトまたは UAE）での申請を検討したいという提案がなされた。

11月26日、スポーツ庁との協議を受けて、陸上競技の選手およびコーチを優先的に招待する方針が定まり、NPC イエメンに候補リストの提出を依頼した。12月2日にはリストが提出され、高野から日本で受け入れやすいのが陸上競技選手であることを伝達し、招へい者の選抜が NPC イエメンによって行われた。

ビザ申請に向けた対応

12月10日から12日にかけて、パスポート情報および申請書類の収集が始まり、日本大使館（カイロおよびドバイ）での申請手順が確認された。以降、選手の居住地に応じて申請対応が分かれた。

【UAE 在住選手に関する対応】

12月26日～30日、高野がドバイの VFS グローバルセンターに電話で連絡を取り、申請の可否や手続きについて交渉し、説明を受けた。その内容をもとにオンラインで申請を行う方針が取られ、予約が確保された。年明けの1月6日、Amal 氏が急きょ渡航予定者の Arwa と高野を繋いでくれたため、両者が WhatsApp を通じて連携しながら申請手続きを実施し、ビザ申請を完了させることができた。VFS からの説明により、ビザ発行には10～12日を要することが確認された。

【イエメン在住選手に関する対応】

12月17日～18日、日本大使館（カイロ）から代理人による申請が可能であるとの示唆があり、パスポート輸送や代理申請の具体的な方法について検討が進められた。12月20日～24日には、大使館から正式な申請手順が通知され、NPC イエメンが書類を整理し、選手とコーチのパスポートをカイロへ輸送した。

2025年1月6日～10日、NPC イエメンの関係者がカイロの日本大使館でビザ申請を提出した。その際、日本側から補足資料を送付して対応を行った。

渡航・来日に向けた調整

1月15日～20日、ビザの発行が確認され、渡航スケジュールを確定することができた。それにより、宿泊施設およびトレーニングキャンプの詳細を確定することができた。イエメン在住の選手団は経由地のカイロで宿泊をすればスムーズな来日が可能になる見通しであったものの、NPC 側の支援が不十分で実現せず、選手・コーチ2名については1日遅れで受け入れる判断がなされた。

1月23日～24日、選手団はそれぞれ UAE およびカイロから日本へ出発した。イエメン発着の国際航空券については適切な便の確保がイエメン国内からしかできず、NPC 側で手配を進めることとなった。カイロからは成田空港経由での入国、UAE からはシンガポールを経由して沖縄へ直接入国するルートでの移動となった。

b. レバノン

2024年11月22日、安岡氏が WhatsApp で「NPC Lebanon for Aichi-Nagoya 2026 APG」グループチャットを

作成したことにより、レバノン NPC との対話が始まった。高野が Marwan 氏（レバノン NPC）とのコンタクトを開始し、第 5 回アジアパラ競技大会（2026/ 愛知・名古屋）に向けて支援可能な選手および競技に関する情報収集を開始した。同日、Marwan 氏より、戦争の影響で一部の選手が避難を余儀なくされており、国内のトレーニング施設の利用が困難であること、加えて資金不足が深刻であることが報告された。

スポーツ庁との協議を経て、11 月 26 日に、今回は陸上競技の選手およびコーチを優先的に招待する方針が決まり、レバノン NPC に対し候補者リストの提出を依頼した。その際、トレーニングキャンプは 2025 年 1 月中旬以降に実施する予定であると伝達した。

12 月 2 日、Marwan 氏から、パラ陸上、パラスイミング、パラバドミントンの選手およびコーチのリストが提出された。これに対して高野より、レバノン国内在住の選手のみが支援対象であることが伝えられた。陸上競技を優先としつつも、水泳およびバドミントンの選手の扱いについては引き続きスポーツ庁との協議を行うと伝達した。

ビザ申請に向けた対応

12 月 9 日～ 12 日にかけて、ビザ申請に向けた書類の準備を開始するとともに、本事業による招へいである旨を伝える文書の作成を行った。Marwan 氏は、日本大使館（ベイルート）でのビザ申請が可能かどうかを確認したが、情勢不安のため日本大使館（ベイルート）がビザ発行などの通常業務を行っていないことが明らかとなり、代替案としてヨルダンやトルコなどの近隣国での申請を検討することとなった。これに伴い、申請者の渡航費用と滞在費用の試算が行われ、ヨルダンでの申請が最もコストを抑えられるとの判断がなされた。

12 月 17 日～ 18 日、日本大使館（ヨルダン）が例外的に代理申請を認めるとの連絡があり、代理人を通じて申請書類とパスポートを DHL で送付する計画が立てられた。しかし、申請者が代理人にパスポートを預けることが難しく、この案は断念され、残されたベイルートでのビザ発行再開に希望を繋げることとなった。

12 月 26 日～ 30 日には、情勢の改善が見込まれ、日本大使館（ベイルート）が 2025 年 1 月 7 日以降にビザ申請を再開する可能性があることが確認された。来日前にヨルダンに 1 週間滞在してビザを取得するという選択肢はあったものの、現実的ではなく、ベイルートでの申請を最優先とすることとした。スポーツ庁との最終調整を経て、ビザが無事に取得できたときの準備として、フライトスケジュールの仮決定を行った。

2025 年 1 月 7 日、日本大使館（ベイルート）が 1 月 9 日よりビザ申請の受付を再開することが確認され、申請書類の再確認と申請予約の確定が行われた。1 月 10 日にはビザ申請が提出され、書類に問題がなければ 1 月 16 日にビザが発行される予定であるとの連絡を受け、フライトスケジュールの調整を再度行った。

渡航・来日に向けた対応

1 月 16 日に予定どおりビザが発行されたことを確認し、フライトの最終調整が行われ、宿泊施設およびトレーニングキャンプの詳細を確定した。参加選手およびコーチとの間で、誓約書ならびに食事補助に関する合意書も取り交わされた。

1 月 23 日、レバノン選手団はベイルートを出発し、トルコを経由して日本へ向かった。成田空港に到着後、那覇に移動し、トレーニングキャンプを開始することができた。

イ. 受入期間とスケジュール概要

イエメンおよびレバノン NPC の選手団を同時に受け入れ、沖縄県名護市（1 月 24 日～ 29 日）および日本体育大学（東京・世田谷キャンパス、1 月 29 日～ 31 日）にて合同合宿を実施した（表 6）。本合宿には両国 NPC 選手団に加え、日本体育大学陸上競技部パラアスリートブロック（水野洋子監督）の協力を得て、3 チーム合同でのトレーニングを実施した。

それぞれの詳細な報告は、項目ごとに後述する。

ウ. イエメン NPC・レバノン NPC 選手団の構成

今回のプログラムでは陸上競技に種目を限定することとした。イエメンからは 2 名の選手とそれぞれのコーチ、レバノンからは 1 名の選手とそのコーチの合計 6 名が参加した。選手のクラス分け等の情報を表 7 に示した。

表6 イエメンおよびレバノン NPC 選手団の来日期間中のスケジュール概要

活動日		内容
1/24	PM	那覇空港到着、プログラム説明ミーティング
1/25	AM	実技トレーニング（スキルチェック等）
	PM	体幹トレーニング、モビリティトレーニング
1/26	AM	実技トレーニング
	PM	ジムトレーニング（ストレンクス&コンディショニング）
1/27	AM	アクティブレスト（悪天候のため室内でバスケットボール）
	PM	2日間のふりかえり、スキル・大会出場等に関するミーティング
1/28	AM	実技トレーニング
	PM	体幹トレーニング、モビリティトレーニング
1/29	AM	名護市から那覇に移動
	PM	羽田空港到着、ミーティング
1/30	AM	JPC 専任トレーナー荒谷幸次氏によるトレーニングセッション
	PM	日本文化体験、JPC マセソン氏・安岡氏との面談、ストレッチ等
1/31	AM	帰国準備
	PM	ふりかえり、アクションプランニング、羽田空港から出国

表7 イエメンおよびレバノン NPC 選手団の名簿

国	氏名	性別	年齢	役割
イエメン	シュフド・シェイク	女	18	選手（クラス：T/F37）
	ハニ・ボキル	男	40	選手（クラス：F57）
	アルワ・アワド	女	43	コーチ
	イブラヒム・アッバス	男	41	コーチ
レバノン	アルズ・ザフレディン	男	26	選手（クラス：T64）
	アフマド・ハゼル	男	35	コーチ

エ. 活動内容の詳細

a. 那覇空港での合流と合同キャンプのスタート

選手団は、選手とコーチのペアごとにまとまって移動し、沖縄入りした。イエメンのシュフド・シェイクとアルワ・アワドはシンガポール経由で那覇空港に到着し、同空港で入国手続きを行った。一方、レバノンのアルズ・ザフレディンとアフマド・ハゼルは成田空港で入国を済ませ、国内線で那覇空港へと移動した。この2組の到着時刻に合わせ、事業スタッフである伊藤と高野も沖縄に入り、空港にて到着を待ち構えた。4名と無事に合流後、予約していたジャンボタクシーに乗り、合宿地である名護市へと向かった。到着後は夕食を共にし、その場でプログラム全体の説明を行った。その際、事前に一部参加者が英語でのコミュニケーションに難があるとの情報があったため、アラビア語・日本語間の通訳を用意し、オンラインで説明に参加してもらった。

イエメンからエジプト経由で移動していたハニ・ボキルとイブラヒム・アッバスの2名は、先述の通り、1日遅れで沖縄入りすることになっていたため、翌日、ジャンボタクシーの送迎サービスを利用し、空港で彼らを出迎えたうえで、名護市の宿泊施設へと送り届けてもらった。

トレーニングは1月25日の午前中から開始され、ハニ・ボキルとイブラヒム・アッバスは午後から合流した。

b. 沖縄でのトレーニング（1月25日～28日）

沖縄では、名桜大学の陸上競技場とトレーニングセンター、名護市陸上競技場を使用した。名桜大学の競技場はトラックの整備が行き届いていたものの、投擲種目のトレーニングができなかったため、両会場を併用する形を取った。名桜大学には日本スポーツ協会コーチデベロッパーが複数在籍しており、そのつながりから施設の利用が実現した。

沖縄合宿の前半は天候に恵まれたが、後半は荒天となり、屋内プログラムへの切り替えを余儀なくされた。それでも、前半は温暖な気候の中でトレーニングができたため、暖かい国から来日した選手たちにとって、スムーズな適応と安心感につながったと考えられる。また、日体大の選手らとはすぐに打ち解け、まるで以前から同じチームで練習していたかのように交流しながらトレーニングに励んでいたのが印象的であった。加えて、現場には4名のコーチが参加していたが、それぞれが自分の担当選手に限らず、手薄になった部分を補完し合いながら指導するなど、相補的なコーチングが行われていた点も印象に残った。



オンラインで通訳を挟んでのプログラムの説明



沖縄でのトレーニング風景

c. 東京でのトレーニング（1月30日～31日）

当初、東京合宿では寒さを考慮した陸上競技のトレーニングを予定していたが、沖縄合宿で見えてきた選手の課題に対応するため、急遽計画を変更することにした。沖縄合宿を通じて、選手たちがアスリートとしての基礎トレーニングを十分に積めていないことが明らかになったため、パラアスリートのトレーニングに精通した JPC 専任トレーナー・荒谷氏の支援を受けることとした。JPC 強化支援課を通じて依頼したところ、快く受け入れていただき、日本体育大学のトレーニングセンターにてベーシックトレーニングのセッションを実施することができた。

また、日本体育大学では、本学伝統芸能・和太鼓同好会「和桜」の学生による和太鼓演奏セッションも行われ、選手たちは演奏を聴くだけでなく、実際に演奏を体験しながら学生たちとの交流を楽しんでいた。その場には IPC 理事のマセソン氏と JPC の安岡氏も同席しており、セッション後には選手たちと対話の時間を設けた。自己紹介から始まり、クラス分け、コーチの役割、大会出場を確実にするための NPC 運営などについて対話が行われ、IPC や JPC の主要なメンバーと直接対話できたことは、選手たちにとって大変貴重な経験となった。

最終日には、世田谷キャンパスにて合宿全体の振り返りを実施した。選手とコーチがペアになり、この1週間のプログラムを振り返りながら、新たな学びを整理し、全体で共有した。その後、今後の目標設定を行い、目標の先にある目的を意識するアクティビティにも取り組んだ。競技力向上に向けた長期的な取り組みを継続するためには、単なる目標設定にとどまらず、その先にある「目的」を明確にすることが重要である。また、日本の支援のもとでトレーニングを行えたことを選手たちがしっかりと認識できるよう、今回の来日キャンプと自身の目的とを結びつけて考える機会とした。そのため、「なぜ？」を繰り返し問いかけ、より深いレベルで目的を探求するエクササイズを実施した。これにより、本事業の愛称である「HOPE」という言葉が、選手やコーチの口からも自然と聞かれるようになり、このプログラムが参加者にとっての希望となるだけでなく、祖国の人々や支援する日本にとっての希望にもつながることを確認する機会となった。

オ. 招へい選手等のトレーニングに関する評価・課題等

a. シュフド・シェイク（イエメン、18歳・女性、T/F37）

シュフドは右半身に麻痺があるアスリートである。フィールド種目では立位やり投げを、トラック種目では 100m



日本体育大学東京世田谷キャンパス・トレーニングセンターにて荒谷 JPC 専任トレーナーの指導を受ける



和太鼓で日体大学生と交流



IPC 理事マセソン美季さんが激励に駆けつける



振り返りミーティングの様子

走を行っている。コーチとして実の母が帯同した。未成年であるため介添人を付けることを求めたが、母親がコーチを兼ねて帯同してきた。

シュフドは非常に活発な性格で、自身の意見をはっきりと持っており、意思表示も明確であった。一方で、母親の関わり方はやや過保護とも受け取れるものであり、日本パラリンピック委員会の安岡氏からは、「子どもがアスリートとして自立し、成長していくためには、母親として過剰に保護する姿勢を改める必要がある」と伝えるとともに、「母親自身がコーチとしての資格を取得し、親としてではなくコーチとして関わっていくことが望ましい」と助言があったという。

この親子はイエメン国籍を有しているが、アラブ首長国連邦 (UAE) 在住であり、一定程度の練習環境は整えられているようであった。一方で、イエメンにおける女性の生きづらさについては、本人たちからも幾度か語られており、今回、女性アスリートとしてシュフドを招へいできたことには大きな意味があったと感じられた。

シュフドは麻痺の影響により、右脚での踏み込みや右腕の使用が困難で、短距離走やラダートレーニングにおいても直線的に走ることが難しい様子が見受けられた。観察の中で、走行中に身体が自然と左側へ傾く傾向があることが

分かり、走行リズムや地面反力を効果的に得るためのドリル、股関節の動作改善に向けた練習などを取り入れながら、スプリントパフォーマンスの向上に取り組んだ。

投擲（やり投げ）の練習では、本学の投擲選手がともに練習に加わり、選手同士で教え合いながらセッションを進めていった。シュフドも積極的に質問をしながら参加しており、有意義な時間を過ごしていた様子であった。助走のステップワークやラストクロスステップのリズム獲得、さらにはやりのリリースの工夫についてもトライアンドエラーを重ねながら感覚を磨いていた。麻痺のために左手で投擲を行っていたが、ラストクロスステップで踏み込む右脚に障がいがあることから、力の発揮と伝達に苦労しているようであった。

投擲やスプリントにおけるスキルの向上は重要である一方で、それを支える基礎的体力の強化が今後の大きな課題であると判断された。そこで、キャンプ後半にはトレーニング方法そのものを学ぶ機会を設けることとした。

b. ハニ・ボキル（イエメン、40歳・男性、F57）

ハニは右下半身に障がいがあり、日常的に両腕で杖を使って生活している。その影響もあって、杖を支えている右側の肘関節が完全に伸びきらない状態となっている。ハニの競技種目は座位やり投げと砲丸投げである。今回の合宿には、イエメン国内に1台しかないという投擲台を持参した。

パラアスリートは競技寿命が比較的長いことが特徴とされるが、ハニは40歳という年齢に差し掛かっており、今後どの程度記録を伸ばすことができるかについては不確定な要素もあった。言語の壁も影響していたのかもしれないが、彼は非常に寡黙な印象を与えるアスリートであった。ただし、こちらから話しかけると笑顔で応じてくれていた姿が印象に残っている。

フライトの関係で、ハニが沖縄に到着したのはトレーニング初日の午前中であり、この日の午前セッションには参加できなかった。午後からのトレーニング参加にあたっては、長時間移動による疲労を考慮し、調整程度の軽い負荷にとどめた。当初、到着後の昼食時には午後の練習を休みたいという意向も示していたが、短期キャンプで既に半日のトレーニング機会を失っていたことや、午後も宿舎で休んでしまうと時差調整が難しくなり、翌日のパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があるかと判断し、日光を浴びることで体内時計を調整する目的から、トレーニング会場への同行を求めた。練習を行わなくてもよい旨を伝えた上で、本人も納得し、午後セッションに同行・参加した。

2日目は、投擲種目の練習が可能な名護市陸上競技場に移動し、持参した投擲台を砲丸投げサークルに設置しようとした。しかし、地面に固定するためのストラップなどを持参していなかったため、現地係員の協力を得て応急的に固定を行った。トレーニングは砲丸投げから開始し、その後やり投げへと移行した。指導は同行していたコーチのエブラハムが担当し、本学博士後期課程に在籍し、投擲のバイオメカニクスを専門とするパラアスリートの山手氏が特に積極的にサポートを行ってくれた。

ハニの投擲動作からは、基礎的なトレーニングの不足が明らかに見て取れた。とくに投擲に必要な筋力の強化が十分でないように思われ、体幹部の筋量も不足している様子であった。スキルの向上はもちろん重要であるが、それ以前の段階として、基礎的な体力づくりへの取り組みが不可欠であると判断された。さらに、年齢を踏まえると、筋力トレーニングに意識的かつ積極的に取り組まなければ、記録向上は難しいと考えられた。

そのような状況であったにもかかわらず、最終日の振り返りと目標設定セッションでは、ハニ自身が「アジアパラ競技大会で金メダルを獲得する」ことを目標として掲げていた。現在の競技レベルとその目標との間に大きなギャップがあることに、本人が十分には気づいていない印象を受けた点は、過去に対応したパレスチナのケースとも共通しているように思われた。これは国際大会への出場経験が乏しいことに起因している可能性がある。情勢が不安定な地域においては、国際大会への参加自体が困難であることを考えれば、ある程度やむを得ないとも言える。

一方で、競技力向上のプロセスをNPCが主体的にマネジメントし、アスリートに対して段階的な理解を促していく教育的アプローチの重要性も改めて実感させられた。最終日の振り返りミーティングでは、具体的な目標の立て方について簡単ではあるが取り上げたため、それがハニにとって何らかの気づきや転機となることを期待している。

c. アルズ・ザフレディン（レバノン、26歳・男性、T64）

アルズは、東京パラリンピックおよびパリパラリンピックに連続出場したスプリンターであり、片足が義足であった。また、以前に実施されたスポーツ庁委託事業「戦略的二国間スポーツ国際貢献事業パラ参加国最大化事業(NEPP)」

においても支援を行ったアスリートであった。今回帯同していたコーチは、その NEPP 支援当時にもコーチングを担当していた人物であったが、東京パラリンピック後に別のコーチが指導することとなり、一時的にパフォーマンスが低下したという話であった。しかし、現在のコーチに戻ってから再びパフォーマンスが向上してきたと、アルズ本人が語っていた。

アルズは非常にプライドが高い一方で、積極的に学ぼうとする姿勢も持ち合わせていた。自らがレバノンのパラアスリートを代表する存在であるという自負があり、競技力の向上に対する意識も高かった。自身で年間計画を立て、大会出場もその中で意思決定していた。もちろん、第 5 回アジアパラ競技大会（2026/愛知・名古屋）への出場に對しても強い意志を示しており、実際に出場する可能性も高いとみられる。

SNS 等での自己広報にも積極的に取り組んでおり、その背景には義足を提供しているスポンサーとの契約もあるようであった。掲載する写真や動画の内容も、本人が妥協せずに選んでいる様子であった。現在は Ossur 社の義足を使用していたが、それ以前は日本の Xiborg が義足を提供していたとのことだった。今回の来日は 3 回目であり、最初は Xiborg 関連のトレーニングキャンプ、次に NEPP 事業と東京パラリンピックでの来日経験があった。食事に関しては特段の制限はなく、何でも試してみたいという考えを持っており、来日中に食事面で困ることはなかった。これはコーチも同様であった。

レバノン国内では、本人の居住地自体は比較的 안전한 地域にあるとのことであったが、練習場所については紛争の影響を受けており、最近では十分に練習ができていなかったと述べていた。また、「父親は軍の General である」と本人が語っており、国内では比較的裕福な家庭出身である可能性が高いと推察された。

コーチのアフマドは、レバノンの元オリンピック選手であり、競技経験や専門的知識を有するものと考えられた。しかし、練習を観察した日本体育大学の水野監督によれば、パラアスリートへの専門的な指導経験や知識は十分でないように見受けられたとのことであった。アフマドコーチは現在も健常アスリートの指導を行っており、そちらに注力している様子もあり、パラ陸上に関する知識を学ぶ機会が少ない、あるいは意識的に学ぼうとしていない可能性もあると推察された。その影響か、アルズがサイズの合わない義足を使用している可能性があり、実際、練習 2 日目には義足のズレを訴えていた。

JPC の荒谷トレーナーには個別に質問を行うなど、知識を得ようとする姿勢が見られた。イエメンの選手たちが荒谷トレーナーの指導を受けている間、アルズはコーチとともにトレーニングセンター内のフリーウェイトエリアなどで、自身のペースでトレーニングを進めていた。

今回の来日キャンプが、彼の年間スケジュールの中でどのような位置づけであったかは不明であるが、日本でトレーニングを行えることを大変喜んでいて、最終日の振り返りミーティングでは、「国の希望となれるよう努力したい」と語っていたのが印象的であった。

カ. 全体を通した振り返り

a. 食事

レバノンの 2 名については、食事については特別な配慮は全く必要なかった。沖縄合宿では、ビュッフェで様々なメニューを試してみていた。イエメンからの 4 名については、ハラル食を希望しており、事前にホテルには伝えていたものの、ビュッフェスタイルのレストランでも苦労をしていた。イスラム教信者のアスリート等を招へいた際の最も大きな挑戦となることは、パレスチナ選手団を招へいた際と同じであった。

b. 移動

今回の移動は、主にタクシーとレンタカーを組み合わせで行った。沖縄では、那覇空港から名護市のホテルまでジャンボタクシー(10 人乗り)の空港送迎サービスを利用した。トレーニングに必要な衣類やシューズ等があるため、アスリートの荷物は大きくならざるを得ないことと、障がいを持つ選手が公共交通機関を使って集団で移動することには困難が伴うことなどから、ジャンボタクシーを利用するという選択をしたが、長時間の移動をしてきた選手が短期間の合宿で成果をあげるためにも必要な判断であったと言える。また、イエメンからは投擲台、レバノンからは競技用義足も持参してきており、公共交通機関を使っただけの移動は現実的ではなかったことも記録に残しておく必要がある。

c. トレーニング環境

長時間の移動を経て来日し、入国翌日からトレーニングを開始したことに対して、選手およびコーチからは「次の機会があるならば、時差調整のための期間を考慮してもらえるとありがたい」との意見があった。この指摘には一理あるものと受け止められる一方で、国際的な競技大会への参加経験がある選手であれば、移動時間の過ごし方も含めて、時差に対する自己調整を含む渡航戦略を講じる必要があるとも考えられた。現在では、短期決戦型の大会において、出国前に自国で時差調整を行い、そのリズムのまま現地で競技に臨んで帰国するというような戦略も一般化してきている。

トレーニングメニューについては、先方から特段の依頼がない限り、日本側が介入する意図はなく、原則として各自が自国の方針に基づいて調整・管理を行うべき事項である。本学のパラアスリートたちと合同で練習を行った際には、結果として彼らのトレーニングに合わせなくてはならないという印象を与えてしまった可能性があり、この点は受入側としての反省点である。

運営側としては、数日間という限られたキャンプ期間において、時差調整を優先するあまり十分なトレーニング時間を確保できない状況は、事業の目的達成という観点から可能な限り回避すべきであるとの判断があった。したがって、移動による疲労があったとしても、初日から練習会場に足を運び、日光を浴びることによって体内リズムを現地に同調させることを意図していた。

本事業を継続的に展開していく上では、受入側が選手団に対してどの程度の関与を行うのか、あらかじめ双方で認識を共有しておく必要があると考えられる。

また、「もっと日本を見たい、知りたい」という気持ちもあったようだが、短期間での集中合宿期間に観光等の時間を取ることは実質不可能であり、彼らもそれを理解してくれた。沖縄では名護市の静かな環境の中でスポーツ合宿に特化した対応ができる施設に宿泊したことで、トレーニングに集中するうえで最適な場を提供できたと考えている。

キ. 帰国後のフォローアップ

本事業の強みの一つは、事業スタッフと事業に参加した選手団との強いつながりであり、それは日本におけるトレーニングキャンプ終了後も継続的に行われる双方向のコミュニケーションに強く表れる。

イエメンから参加していたシュフド選手(UAE 在住)は、帰国直後に UAE で開催された 13th Sharjah International Open Para Athletics Meeting 2025 に出場し、T37 の 100m では 20'07 の自己新記録、F37 のやり投げでは 13.10m の自己新記録を残した。さらにその後開催された State Athletics Championship では 100m で 19'19 と更に自己新記録を更新した。母親でコーチ役を務める Arwa からは、パフォーマンスの映像が送られてきており、それを、日本での指導に協力した本学陸上競技部パラアスリートブロックの水野監督にみせ、更なる改善ポイントをフィードバックしている。Arwa は高野コーディネーターとのやりとりで「レースに臨む前に日本で学んだすべての指示を彼女に与えた。これが彼女にとってとても役立った。私たちはクラブの経営陣と会い、トレーニングの内容を変えることにした。彼らは私たちの意向を受け入れ歓迎してくれた。」とも述べており、今回の来日キャンプの実施が、若い女性アスリートの将来を大きく変えようとしていることが分かる。Arwa はイエメン NPC とのミーティングを設定し、日本でのキャンプのレポートを行ったところ、NPC の幹部たちもその成果にとっても驚いていたという報告をしてくれた。



帰国後、大会で好成績を出したシュフド

3) アフガニスタン NPC 選手団受入プログラム

ア. 受入プログラムの準備

アフガニスタン NPC 選手団の来日キャンプ実施において、もっとも困難だったのは事前準備、とりわけ日本国査証の取得であった。アフガニスタン NPC の事務局長は現在ロンドンに在住しており、そのアシスタントも同じくロンドン在住である。一方、NPC 会長はカブールに在住しているが、我々との細かいやりとりについては会長には伝わっておらず、実質的な調整のほとんどは事務局長レベルで進められていた。日本とカブールの時差は 4 時間 30 分であるが、やりとりの中心がロンドンの関係者であったことから、ロンドン時間に合わせての連絡が多く、深夜に全体のやりとりを行うことが常態化していた。

アフガニスタン NPC との最初の接点は、2024 年夏のパリ・パラリンピック期間中に得られた。JPC の業務でパラリンピックの視察を行っていた伊藤が、JPC 国際部で本事業アドバイザーを務める安岡由恵氏のアレンジにより、選手村内のアフガニスタン NPC の居住エリアを訪問した。伊藤はその場で NPC 事務局長と対面し、本事業の趣旨を直接説明し、NPC 側が選手の選抜などを進めていく意向を確認した。

この時点で、女性選手の参加についても日本側から打診を行った。現政権下のアフガニスタンでは女性選手の活動は極めて困難であるとの説明があり、選手本人にとってもリスクが大きいことから、国内での発掘・育成は現実的でないことが共有された。ただし、事務局長は女性選手を支援することの重要性を理解しており、イランなど国外で活動しているアフガニスタン国籍の障がい者女性選手がいないか調査することを検討すると述べた。こうした状況を踏まえ、日本側としては、今回の招へいにあたって女性選手を積極的に選抜することを強く求めることは控える判断を下した。

招へい対象の選定と競技調整

2024 年 10 月 28 日、アフガニスタン NPC から最初の派遣希望選手名簿が提出された。リストにはパワーリフティング、陸上競技、テコンドーの 3 競技の選手が含まれていた。このリストを受けて、日本側は競技別団体に受入の可否を照会し、パワーリフティングについては日本パワーリフティング協会、テコンドーについては全日本テコンドー連盟のハイパフォーマンスディレクターに確認を行った。その結果、両団体からいずれも受け入れ可能である旨の回答があった。

その後、アフガニスタン NPC に対し、第 5 回アジアパラ競技大会（2026/ 愛知・名古屋）への出場が最も見込まれる競技について照会したところ、テコンドーが最も可能性が高いとの回答を得た。なお、パワーリフティングでリストアップされていた選手については、現時点での記録が参加標準記録の約 50% 程度であり、今後の期間で達成するのは極めて困難であると判断し、招へいは見送ることとした。

テコンドー選手については、2025 年 2 月に大東文化大学テコンドー部で受け入れが可能であることが確認され、日程を固定した上で、来日可能な選手とスタッフのリストアップを NPC に依頼した。またこの時点では、イエメンおよびレバノン NPC と合同での沖縄合宿（1 月末）に陸上競技選手が参加できる可能性も残されていたことから、陸上競技の候補選手についても並行してリストアップを依頼していた。しかし、最終的には査証取得の困難さを踏まえ、陸上競技選手の招へいは見送り、テコンドー選手 2 名とコーチ 1 名の招へいに絞ることとなった。日本側からその方針を正式に伝えたのは、2024 年 12 月 3 日（火）の深夜であり、最終的に後の表 8 に示すとおり、選抜された 3 名（選手 2 名+コーチ 1 名）が来日することとなった。

査証取得に向けた対応

日本国査証取得に向けた準備は 10 月末の段階で始まっていたが、本格的に動き出せたのは 12 月 6 日（金）以降であった。アフガニスタン国内にある日本大使館（カブール）は通常業務を停止していたため、査証手続きは他国にある在外公館で行う必要があった。最初に候補として検討されたのは UAE での手続きであったが、さまざまな障壁が確認され、この選択肢は採用されなかった。

12 月 18 日の段階でパキスタンでの査証取得が検討されたが、その後、パキスタン国内でアフガニスタン人が多数逮捕されるという報道が確認され、選手等をリスクにさらすことはできないと判断し、この案も却下された。最終

的にこの案を正式に断念したのは2025年1月8日であった。

その後、1月10日にイランでの査証取得という新たな選択肢が浮上した。スポーツ庁が外務省等と連携して調整を行い、1月14日にテヘランにある日本大使館で査証申請が可能となったことが確認された。この時点で、選手団はすでに渡航準備が整っており、カブールからテヘランへの移動が迅速に実施された。ただし、イランに入国するためにも別途イラン査証が必要であり、その取得には現地の専門エージェントに手続きを依頼する必要がある。日本側でもさまざまな選択肢を模索したが、最終的に、見積書や文面などから信頼に足ると判断されたエージェントに依頼を行い、テヘランでの日本査証取得までの渡航およびイラン査証取得を進めることとした。

このプロセスの中で、もう一つの大きな問題が発生した。それは、専門エージェントに対する経費の支払いである。アフガニスタンでは現在、銀行機能が正常に稼働しておらず、本学や日本の旅行代理店が保有する海外送金手段では確実な経費の送金ができないことが判明した。この問題についてNPC事務局長と相談したところ、事務局長の友人で両替商を営んでいる人物が、緊急的に必要経費を立て替えてくれることとなった。イラン滞在中の旅費や滞在費もこの両替商を立て替えて支援してくれたことにより、選手団は無事にテヘランで日本国査証を取得することができた。NPC事務局長によれば、このような誠実な支援者によってNPCの活動が支えられているとのことである。査証取得後には、この両替商に対する返金が新たな課題として浮上した。大学から直接経費を振り込むことができないため、伊藤が個人的に必要経費を立て替え、Western Unionを介して返金を実施し、その後、大学から伊藤に対して返金を受けるという方法を取らざるを得なかった。このような複雑な資金の流れは当初想定していたものではなく、できれば避けたい手法であったが、事業を円滑に遂行するためには他に選択肢がなかった。

渡航・来日に向けた対応

在アフガニスタン・イラン大使館にてイラン国査証の取得を行った後、2025年1月29日に選手団はイランに渡航し、翌1月30日に日本大使館（テヘラン）にて日本国査証の申請を行うことができた。しかし、その後大使館から書類に不備があったとの連絡があり、事業スタッフも書類の再チェックを行った。しかし、書類は事前に外務省やスポーツ庁でも確認済みのものであり、事業スタッフで再度確認しても不備な箇所が発見できなかった。そこで、再度文書を作成し直し、書類の保存方法を変えてみるなど、いくつかの対策を施し、結局最後まで不備な箇所は明確になっていないものの新しい書類を提供した。発給までの期間、選手団は身分を示すパスポートがないため、ホテルから外出することができず、ホテルにて発給の知らせを待った。

ビザが予定の日数で発給されることを見込んで、テヘランから東京へのフライトを調査し、ビザ発行に関する続報を待った。2月3日に大使館より2月5日にビザ発行の最終決定が行われるとの連絡がはいった。最終的に選手団からビザが発行されパスポートを受け取ったと連絡が入ったのが2月6日であった。そして2月7日にテヘランを出発し、ドバイ経由で成田空港へと移動した。アフガニスタン選手団は2025年2月8日に成田空港に到着し、伊藤と高野が出迎えた。帰国時には成田空港からドバイを経由し、カブールに戻るルートが確保されたため、来日時に比べて大きな懸念事項はなかった。

イ. 受入期間とスケジュール概要

アフガニスタンNPC選手団を受け入れたのは2025年2月8日（土）～2025年2月15日（土）であった。来日期間中のスケジュールの概要を表8にまとめた。

ウ. アフガニスタンNPC選手団の構成

アフガニスタンNPC選手団はテコンドー選手とそのコーチで構成されていた。選手は共にK44のクラスであった。このうちモハマド・マルダンは2023年に開催された杭州アジアパラ競技大会に出場した選手であった（表9）。

エ. 活動内容の詳細

a. 来日とJPCユースアスリート研修

選手団は先述のとおり、いくつかのハードルを乗り越え、日本国査証を取得し、イラン・テヘランから成田空港へと移動してきた。成田空港に到着したのは2025年2月8日の夕刻であった。空港では伊藤事業責任者代理と高野

事業コーディネーターの2名が選手団を出迎えた。選手団が税関を抜けて、待ち構えている我々の前に姿を現したときに大きな喜びと安堵感は言葉に表せないほどであった。

選手たちを車に乗せ、成田空港から宿泊場所である東京都北区のナショナルトレーニングセンター（NTC）へと移動した。選手団は2月8日～9日に開催されるJPCユースアスリート研修にて、ユースアスリートたちとの交流を行うこととなっていたことから、NTCに宿泊することとした。NTCに到着する際には日本パラリンピック委員会のスタッフが出迎えてくれ、さくらダイニングにて夕食をとった。そのまま、NTC イーストに移動して宿泊をし、翌日（2月9日）のJPCユースアスリート研修に備えた。

2月8日～9日はJPCがアジアユースパラゲームスに出場することが期待される選手を集めて研修を行うこととなっていた。JPC強化本部員である伊藤に対してJPC強化支援課より研修会講師の依頼があったが、今回のアフガニスタン選手団受け入れ日程と重複しているために一旦はお断りをした。しかし、偶然日程が重なっていることを利

表8 アフガニスタンNPC選手団の来日期間中のスケジュール概要

活動日		内容
2/8	PM	成田空港到着、ナショナルトレーニングセンターに移動
2/9	AM	日本パラリンピック委員会ユースアスリート研修参加等
	PM	世田谷に移動、滞在期間中の説明、食料の買い出し等
2/10	AM	ウォーキング、休養、ジムトレーニング
	PM	休養、テコンドー練習（大東文化大学）
2/11	AM	ウォーキング、休養、ストレッチ等
	PM	休養、テコンドー練習（大東文化大学）
2/12	AM	休養
	PM	日本体育大学理事長表敬訪問、テコンドー練習（大東文化大学）
2/13	AM	休養、日本文化体験（日枝神社見学）
	PM	オリンピックミュージアム見学、大東文化大学学長表敬訪問、テコンドー練習（大東文化大学）
2/14	AM	休養、ジムトレーニング
	PM	休養、テコンドー練習（大東文化大学）
2/15	AM	帰国準備
	PM	日本体育大学岡田隆教授によるレクチャー、ふりかえり、アクションプランニング、羽田空港から出国

※選手団3名は日本入国査証取得のため、来日前の1月29日～2月7日、イラン・テヘランに滞在した。

表9 アフガニスタンNPC選手団の名簿

氏名	性別	年齢	役割
アリ・サジャド・ハムラズ	男	25	選手（テコンドー、K44）
モハマド・マルダン	男	29	選手（テコンドー、K44）
フマユーン・アミリー	男	40	コーチ、チームリーダー



JPC ユースアスリート研修にて日本のユースパラアスリートたちと交流

用すれば、アフガニスタンの選手団にとっても、日本の将来を担うユースパラアスリートにとっても素晴らしい学びの機会が創出できると気づき、強化支援課と相談の上、コラボレーションをすることとなった。

2月9日の研修は8:30からスタートした。日本のユースアスリートらは前日のアクティビティからのつながりで自分たちに必要とされる人間性の要素をまとめるところから始めていた。その間、アフガニスタン選手団にも自分たちが競技に取り組む上で大切に思うことは何かを考え、優先順位を付けるように指示をして、自分たちで考えてもらった。9:00～9:50がアフガニスタン選手団と日本のユースアスリートらとの交流セッションであったが、伊藤がファシリテーターとして3名の選手たちからいろいろな話を聞いていった。そして、直前のアクティビティで作成していた、アスリートとして大切なことのまとめを、日本人ユースアスリートの結果とアフガニスタン選手団の結果とを並べて表示し、その内容の比較を行った。日本人選手は「感謝」が上位にあったが、アフガニスタン選手は「国を愛すること」「スポーツを愛すること」という言葉が出ていた。お互いの違いは印象的であったようで、日本人選手も研修会最後の学びの振り返りで、アフガニスタン選手との交流で得られた気づきを多く共有していた。

今回の研修は、アフガニスタン選手団にとってももちろんであるが、日本のユースアスリートの思考の幅を広げる役割を大きく果たしたのではないかと考えている。アフガニスタンの選手の一人、アリが先日父親を亡くしたにもかかわらず、来日して頑張っていることに言及している選手もおり、アフガニスタン選手団との交流は大きなインパクトを与えたと言える。

研修会での交流にあたり、東京外国語大学に協力を依頼し、ダリ語と日本語（または英語）の通訳者を紹介してもらった。選手たちが自らの思いを母語で語る事ができたことは、非常に有効であった。また、この通訳者は、事業で依頼した業務にとどまらず、個人的にも選手団への支援を行ってくれたため、選手たちも安心して練習に取り組むことができた。我々運営側も、文化的配慮が求められる場面において助言を受けながら対応することができ、大いに助けられた。

b. 大東文化大学でのテコンドートレーニング（2月10日～14日）

今回アフガニスタンから招へいたのは、テコンドー競技の選手であった。日本体育大学にはテコンドー部が存在



学校法人日本体育大学理事長、日本体育大学学長等との交流



日本体育大学運動部観察や学生たちとの交流

しないため、外部に受け入れ先を確保する必要があった。これを受けて、JPC 強化本部員である伊藤が、交流のある全日本テコンドー協会パラテコンドー・ハイパフォーマンスディレクターの作田氏に相談したところ、同氏が監督を務める大東文化大学体育連合会テコンドー部において受け入れが可能との回答を得た。総監督の金井氏をはじめとする複数のコーチは、伊藤が講師を務めた研修会の受講経験があり、既に面識があったことも、協力体制の構築にあたり、合意形成を円滑に進める一因となったと考えられる。

大東文化大学テコンドー部は、アフガニスタン選手団の受け入れに対して非常に前向きであり、初日からあたかもこれまでも共に練習していたかのように、自然かつ温かく迎え入れてくれた。そのため、長旅による疲労がある中でも、選手たちは笑顔で練習に参加することができた。

今回は大学の部活動への参加という形であったため、練習時間は夕方 6 時集合、9 時終了というスケジュールで実施された。また、大東文化大学には、パリ・パラリンピック日本代表の工藤選手も在籍しており、同じ練習環境で共に汗を流すことができたことは、アフガニスタン選手にとって大きな刺激となった。

2 月 13 日（木）には、練習前に大東文化大学の高橋学長を、スポーツ庁の松尾氏とともに表敬訪問し、本事業の



大東文化大学でのトレーニング、学長表敬訪問

目的について説明を行うとともに、選手団からも直接お礼の言葉が伝えられた。高橋学長からは、歓迎の意が示されるとともに、本事業が大東文化大学の学生にとっても貴重な学習機会となっているとのコメントがあった。また、金井総監督からは「大東文化大学テコンドー部は、学生の学びのためにこのような国際的な受け入れ事業を今後も積極的に展開したい。今後もこのような話があれば、ぜひ相談してほしい」との力強い言葉をいただいた。

本事業は日本体育大学が受託したものであるが、今回のように他大学との連携によって活動の幅を広げることは、事業の発展や人的ネットワークの拡大において重要な要素であると感じた。むしろ、日本体育大学に当該競技の部活動が存在する場合であっても、意図的に外部の大学や団体と連携しながら、より開かれた形で本事業を展開していくことも一つの可能性であると考えられる。



日本体育大学岡田隆教授との対話

c. 岡田隆教授との対話および振り返りミーティング

2月15日（土）には、15時より振り返りミーティングを実施した。一週間の活動を振り返る前に、本学の岡田隆教授による「筋力トレーニングの考え方」に関するセッションを行った。このセッションは、キャンプ期間中の選手やコーチの様子を観察する中で、テコンドーの実技練習は行っているものの、筋力トレーニングや栄養管理、コンディショニング、スポーツ医学に対する意識が十分ではないと感じられたことから企画したものである。柔道日本代表チームのストレングス&コンディショニングコーチとして活躍された岡田教授には、オリンピックでの金メダル獲得を目指して日本の柔道選手たちがどのような取り組みを行ってきたのか、写真等を用いながら具体的に紹介していただくよう依頼していた。

実際に、トップアスリートがどのようなトレーニングを継続し、身体が8年間でどのように変化していったかを視覚的に知ることにより、アフガニスタンの選手たちの意識にも一定の変化が見られたように思われる。その証左として、振り返りの時間において、選手たちは帰国後のアクションプランとして「週2回の筋力トレーニングを実施する」と明記しており、本セッションが好影響を及ぼしたものと考えられる。

ミーティングの最後には、この一週間で得た新たな学びと、今後の取り組みに関する計画を各自が整理し、書き出す作業を行い、全日程を終了した。

オ. 招へい選手等のトレーニングに関する評価・課題等

a. アリ・サジャド・ハムラズ（K44-58kg 級）

アリ選手は小柄ながら優れたスピードを備えており、アスリートとして成長したいという意欲が非常に強かった。日本滞在中も、できる限り多くのことを吸収しようと努めており、常に笑顔を絶やさない姿が印象的であった。

テコンドーのトレーニング中、初日に右脚のハムストリングスに違和感を覚え、一時的に練習を中断して様子を見る場面があった。この違和感は、トレーニングキャンプの最終日まで続いていたようである。特に今回のような短期間のトレーニングプログラムでは、ケガによって予定された練習が実施できなくなる事態は避けるべきである。



伊藤事業責任者代理との振り返り（左）と空港での見送り（右）

アリ選手はケガの兆候があったものの、その後も意欲的にトレーニングに取り組み、大きな支障とはならなかった。概ね良好なトレーニングが行えたと評価している。ただし、今後は長距離移動後にどのようにコンディションを整えるか、また宿泊先でどのような準備的トレーニングを行うかを自身で考え、対応していくことが、より良い成果につながるだろう。

ケガそのもの以上に懸念されるのは、ケガの予防（リスク管理）およびケガへの対応の在り方である。国際的なアスリートとして活動していく上で、長距離移動は避けられない現実である。直近で十分なトレーニングができていない状態にもかかわらず、アリ選手は、日本の選手たちと同様の高強度の練習に取り組もうとしたことが、結果的に負荷の蓄積につながった可能性がある。今後は、周囲に流されず、自分に必要なトレーニング内容を的確に判断し、実行できる「トップアスリートとしてのマインドセット」を育むことが求められる。また、ケガの予防という観点からも、基礎となる筋力トレーニングを積極的に導入する必要がある。

パフォーマンスの向上には、テコンドーの技術のみならず、筋力、パワー、柔軟性、敏捷性、持久力などを総合的に鍛えるホリスティックなアプローチが重要である。特に 58kg 級で戦うことを考えると、体重の増加が必要となるため、筋力トレーニングの導入とあわせて、食事の改善が不可欠である。また、トレーニング後のアイシングや栄養補給において、スポーツ医学および科学的知見を活用することにより、より効果的な成果が期待できる。

我々のチームも、アリ選手のひたむきな姿勢に幾度となく励まされた。今回の日本での経験や、振り返りの中で示された意識の変化が、今後の成長とパフォーマンス向上に着実に結びついていくことを願っている。

b. モハマド・マルダン (K44-63kg 級)

モハマド選手は、自身のパフォーマンス向上に対して非常に高い意欲を示していた。テコンドーのトレーニングにおいては、自分の順番を待つ間も、他のアスリートが技をどのように繰り返しているかを熱心に観察しており、前向きな姿勢と強い情熱が特に印象に残った。英語でのコミュニケーションは得意とはいえなかったものの、積極的に周囲との関わりを持ち、言葉の壁を越えて意思疎通を図ろうとする姿勢が見られた。

アリ選手と同様に、モハマド選手にも基礎的な筋力トレーニングの不足が見受けられた。両腕の欠損により身体のバランスを取ることが難しいという特性があるからこそ、体幹の安定性を高めることがより重要である。さまざまな体幹トレーニングを取り入れることで、競技動作時の姿勢保持や衝撃吸収が可能となる。

キャンプ期間中、モハマド選手は対戦相手の蹴りを受けた際に痛みを感じたと話していた。体幹筋（コアマッスル）を強化することで、こうした衝撃を緩和し、ダメージを軽減することができる。いわば「筋肉の鎧」をまとうようなイメージであり、これによりケガの予防にもつながる。

また、複雑なステップワークを含むトレーニングを導入することで、敏捷性やバランス感覚の向上も期待できる。さらに、トレーニング効果を最大限に引き出すためには、適切な栄養摂取や水分補給への意識も欠かせない。スポーツ医学や科学的知見を活用しながら日々のトレーニングを構築していくことが、パフォーマンス向上への確かな道筋となる。

モハマド選手に関して特に印象的だったのは、テコンドーの枠を超えて他競技への関心を強く示していた点である。日本体育大学の学生によるトレーニングにも強い興味を示し、積極的に観察していた姿が印象的であった。今回の短期間のキャンプにおいて、すべてを深く学ぶことは難しかったかもしれないが、今後もこの旺盛な好奇心を大切に、競技の枠を超えて学びを広げていくことが期待される。

c. Houmayoon Amiry (コーチ、代表団リーダー)

Houmayoon 氏は、アスリート 2 名のコーチとして、また代表団のリーダーとして本キャンプに参加した。日本への渡航にかかる一連のプロセスにおいても適切な対応を行い、困難な状況の中でもチームとしての目標達成に向けて尽力していた。

日本とアフガニスタンの間には、文化的に大きな違いがあり、代表団が日本の文化に戸惑う場面もあったものと思われる。同様に、事業スタッフ側も異なる価値観や考え方に直面し、戸惑うことがあった。しかし、互いの違いを尊重し、理解を深める努力を重ねる中で、最終的にはキャンプを共に成功させることができたと感じている。それは、Houmayoon 氏が他者の意見に耳を傾け、自らの考えに固執することなく、常にバランスの取れた判断を下す人物で

あったことが大きい。

キャンプ最終日には、振り返りミーティングを実施し、アスリートのみならずコーチ自身の成長についても考える機会を設けた。コーチが成長することで、アスリートがより高いレベルに到達できる可能性が高まる、という話を共有した際、Houmayoon氏は「まさにその通りだ」と笑顔で応じてくれた。

本事業の運営チームは、構成員それぞれがチーム全体の成長に貢献することを重視し、常に互いに意見を出し合いながら進めている。リーダーも時に判断や行動を誤ることがあり、その際に信頼できるメンバーからのフィードバックがなければ、リーダーの限界がそのままチームの限界となってしまう恐れがある。Houmayoon氏が、コーチ自身にも「Kaizen（継続的改善）」の責任があるというメッセージに共感してくれたことは非常に心強く感じた。

アスリートを指導する立場にあると、課題の原因をアスリート側に求めがちである。しかし実際には、真の課題は指導者やリーダー自身の中にあることも多い。我々自身がそのことを自覚し、アスリートがより豊かな人生を歩めるよう、共に成長していくことが重要である。Houmayoon氏がこの考えを理解し、今後の指導に活かしていくことを期待している。

カ. 全体を通した振り返り

a. 日本体育大学世田谷ゲストハウスとレンタカーの利用

今回の主たるトレーニング会場が東京都板橋区に所在する大東文化大学板橋キャンパスであったことを踏まえると、その周辺のホテルを生活拠点とすることも一つの選択肢であった。しかし、テコンドーの練習時間が原則として18:00～21:00に設定されていたことから、午前・午後の時間帯をいかに有効活用するかを検討する必要があった。

その観点から、日本体育大学世田谷キャンパスにあるトレーニングセンターやセミナールーム等を活用して各種アクティビティを計画できること、ならびに多様な競技種目のトレーニング風景を観察できる機会があることが利点と判断され、本学世田谷キャンパス至近に位置するゲストハウスを宿泊拠点とすることとした。

ゲストハウスでは、選手・コーチ計3名に対し、ツインルームをシングルユースで割り当てた。宿泊室は2階に位置しているが、1階にはキッチン、ランドリー、ラウンジが整備されており、一般的なホテルと比較しても合宿向きの構造となっている。これまでのパレスチナ、イエメン、レバノンの選手団受け入れ時には、食事面での配慮が必要となり、受け入れ側にとっても対応が困難であったが、今回はキッチンの利用が可能であったことから、選手団が自らスーパー等で食材を購入し、朝食や昼食を自炊する体制を取ることができた。なお、同時期に本学ソフトボール部女子の来年度入学予定者がゲストハウスに滞在しており、選手団との間で簡単な交流が行われる場面も見られた。

先述のとおり、大東文化大学付近に宿泊する案も視野に入れてはいたが、総合的に判断すれば、世田谷のゲストハウスを拠点とした今回の選択は妥当であったと考えている。本学に近い場所に宿泊していたことで、事業スタッフは通常業務を維持しつつ、日常的に選手団の対応が可能となり、無理のない形での事業運営が実現できた。

一方で、日本体育大学世田谷キャンパスと大東文化大学板橋キャンパス間の移動距離が長い点については、一定の負担があった。特に往路は、渋滞が発生しやすい時間帯の移動となる懸念があったが、結果的には大きな問題は生じなかった。ただし、復路については21時に練習が終了し、食事を終えてゲストハウスに戻るのが23時を過ぎることが常態化していた。これを踏まえ、翌朝のプログラムについては運営側で一律に時間を指定することは避け、選手団に自主的な判断を委ねる形で対応した。

b. 食事

3名ともハラル食対応が必要であったため、朝食は宿泊先であるゲストハウスにて各自が自炊する形とした。チェックイン当日には、全員をスーパーマーケットに案内し、自分たちで食べられる食品を選んでもらった。

大東文化大学での練習が21時に終了することから、帰路の途中にあるファミリーレストランに立ち寄り、夕食をとることとした。利用した店舗はサイゼリヤ（2回）およびガスト（2回）であった。選手団が注文したメニューは、基本的に野菜またはシーフードのピザが中心で、それ以外ではエビフライ、サラダ、チキン（グリルまたは唐揚げ）等であった。

なお、練習に向かう前にはコンビニエンスストアに立ち寄り、ポカリスエット、チョコレートバー、ゼリー飲料等を購入したが、ゼリー飲料についてはあまり好みに合わなかった様子であった。

c. 休日・自由時間

大東文化大学での練習を終えてゲストハウスに戻るのが連日 23 時頃となったことから、選手のコンディションを考慮し、毎晩ゲストハウスでの解散時に翌日午前中の予定を調整する運用とした。

日常的に高強度のトレーニングを積んでいる日本人選手との練習は、アフガニスタンにおけるトレーニング環境とは比較にならないほど負荷の高いものであったと推察される。そのため、選手とコーチが相談の上、翌午前中の時間帯には積極的休養や軽いウォーキングを取り入れるほか、コンディションに応じてトレーニングジムでのワークアウトも実施していた。

d. トレーニングシューズの支給

アフガニスタンでは、体育館やジムでのトレーニングを外履きのまま、あるいは素足で行うことが一般的である。このため、今回来日した 3 名はいずれも内履き用のトレーニングシューズを持参していなかった。

本学のトレーニングジムでは、安全管理の観点から内履きシューズの着用が義務付けられているため、体育館およびジムでの使用を目的として、3 名にトレーニングシューズを支給した。

キ. 事後のフォローアップ

アフガニスタン選手団が帰国して以降も、コーチや選手らとのコミュニケーションを継続的に行っている。その中で、今回のアフガニスタン選手団のチームリーダーであり、コーチも務めた Houmayoon Amiry 氏から、英文による詳細な振り返りレポートが寄せられた。その中で氏は、東京での滞在中および本事業への参加を通じて得た多くの学びと感銘について、率直な言葉で次のように綴っている。

まず、日本社会全体に対する印象として、法と秩序が極めて高い水準で保たれており、社会正義が重要な役割を果たしていることを強調している。人々が憲法や交通規則を含む諸法規を遵守することを当然の義務と考えている点、また都市の清潔さやゴミ管理の徹底ぶりについても強く印象に残ったと述べている。また、時間管理、倫理観、誠実さ、忍耐力、そしてホスピタリティに関しては、東京の人々に「100 点を与えたい」と表現している。

続いて、事業に関連する体験としては、日本の高齢者が健康的かつ精神的に安定した生活を送っていることに触れ、それが日々の運動や自転車移動、規則正しい食生活などを大切にする文化に支えられていると評価している。指導者や大学関係者、アスリートたちの振る舞いや支援についても言及があり、なかでも本事業の責任者を務めた教職員や運営スタッフの姿勢については、「高い教育と豊かな経験を持ちながらも、我々のために昼夜を問わず献身的に対応してくれた」と感謝の意を示している。

特に印象的だった点として、練習中においても日本側の指導者が怪我のリスクを最小限に抑えるよう配慮しながら、安全に配慮した指導を行っていたこと、また、アフガニスタン選手団の動きが未熟であっても常にポジティブな声かけで励まし、現代的かつ体系的なトレーニング方法を共有してくれたことへの謝意が述べられている。

また、本プログラムを通じて、「総合的なマネジメント」の重要性に触れ、関係者の多岐にわたる役割遂行の姿を通して、運営の在り方についても深く学ぶことができたことと振り返っている。

加えて、アフガニスタン国内においては、国内移動ですら困難であり、ましてや海外渡航にかかる費用（ビザ、航空券等）を個人で負担することは現実的ではない中で、本事業が実現したことは「人生の夢の一つが叶った」との表現があった。また、本事業に選ばれる人々は、社会との接点が多く、帰国後にはその経験を多くの人々に共有することによって、両国間の理解と友好がより深まる可能性があるという点についても、示唆に富む言及がなされている。

最後に、今後の取り組みへの提案として、今後の交流プログラムにおいては、日本の文化や名所を訪れる機会も 1 日程度設けてはどうかという提案があった。今回、日本オリンピックミュージアムを訪れた際の経験が非常に印象的だったとのことである。

以上のように、Houmayoon 氏からの報告は、本事業が競技力向上支援にとどまらず、国際的な相互理解や信頼関係の構築にも寄与していることを裏付けるものであり、本事業の意義を再確認させる内容となっている。

3. 広報媒体での発信・取材情報

本事業の活動内容は、以下の媒体にて発信された。

1) テレビ

- ・2024年11月3日(日)『おはよう日本』スポーツコーナー
パレスチナ NPC 選手団受入プログラムでの活動内容について、4日間の取材を受け、4分間程度で紹介された。

2) 新聞

- ・2024年10月26日(土)
パレスチナ NPC 選手団受入プログラムについて、「来日し、日体大で合宿したパレスチナ選手団 戦禍、スポーツは無力か」のタイトルで紹介された。
<https://mainichi.jp/articles/20241026/dde/035/050/001000c>
- ・2025年2月6日(木)
イエメン・レバノン NPC 選手団受入プログラムについて、「希望という名の事業」とのタイトルで紹介された。
<https://mainichi.jp/articles/20250206/dde/012/070/006000c>

3) 学報

- ・学報 NITTAIDAI79
日本体育大学の学報にて、本事業の全体像について紹介をした。その中では、「日体大のミッションを实践する前例のない挑戦」「オール日体大」の力と強みを最大限に発揮」という見出しとともに、特にパレスチナ NPC 選手団受入プログラムについての紹介を行った。
<https://www.nittai.ac.jp/albums/abm.php?d=514&f=abm00008145.pdf&n=79web.pdf>



学報 NITTAIDAI79 の掲載記事イメージ

4. 本事業を通じて得られた知見と今後に向けた考察

本事業は、国際情勢が不安定な国・地域のパラアスリートを日本に招聘し、トレーニング機会を提供することを目的として実施された。対象としたパレスチナ、イエメン、レバノン、アフガニスタン NPC 所属の各選手団に対して、限られた期間ではあったが、競技環境の提供と専門的な支援を通じて、一定の成果を得ることができた。以下に、本事業全体を通じて得られた知見と、今後の支援のあり方に関する考察を記す。

1) 国際情勢に応じた海外アスリート等支援における成果と限界

本事業を通じて、日本でのトレーニング機会を得たアスリートたちは、競技スキルの向上だけでなく、自らの競技と向き合う意味を深く考える機会を得ていた。ヤザン選手は 100m 走において、初日のタイム 19"54 から最終日には 18"45 へと約 1 秒のタイム短縮を実現した。シュフド選手は自身の身体の特性と丁寧に向き合いながら、走行フォームややり投げのステップなどに粘り強く取り組んでいた。また、アルズ選手はパラリンピアンとしての自負を持ち、自身の年間スケジュールを主体的に構成しながら、日本でのトレーニングにも高い意欲で臨んでいた。アリ選手も、感覚的な身体操作への鋭い感受性を持ち、地道に調整を続けながら成長の兆しを見せていた。

トレーニングキャンプでは、日々の活動の中に振り返りの機会を組み込み、そこから選手自身が目標や行動の意味を再確認するプロセスを設計していた。その中で選手たちの口から自然と出てきた言葉のひとつが「HOPE（希望）」であった。これは、なぜ自分たちが困難な状況の中でも競技に取り組むのか、スポーツを通じてどのような希望を見出すことができるのかを深く考えるきっかけとなっており、スポーツが果たす可能性の一端を示すものであった。

その一方で、選手によって目的意識や将来の展望の持ち方には差がみられたことも事実である。選手の招へいに際しては、各 NPC が候補者を推薦する形をとったが、今後は、競技力向上に向けた明確な目標や計画を持つ選手を、より戦略的に招へいしていく視点も必要となるだろう。もちろん、日本がこの支援を行う目的は大会の出場支援に限られるものではないが、目の前に具体的なマイルストーン（たとえば第 5 回アジアパラ競技大会(2026/愛知・名古屋)）があることは、アスリートの目標設定や動機づけの上でも有効であり、事業の構成要素として活用していく意義がある。

また、実施期間の設定においては、さらなる工夫の余地があることも明らかになった。今回のトレーニングキャンプは、おおむね 1 週間程度の期間で実施されたが、渡航による心身の負担や時差調整の必要性を考慮すると、トレーニングに十分に集中できる時間を確保するための工夫がもう少しあってもよかったかもしれない。特にパラアスリートにとっては、長距離移動や生活環境の変化が大きな負荷となりやすく、トレーニングに集中できるようになるまでには、健常者よりも長い準備期間を要する可能性がある。今後、より確実にトレーニング効果を引き出すためには、滞在期間に一定の余裕を持たせ、適切な順応期間を設けるようなプログラム設計が求められる。

2) NPC の脆弱性とアスリート支援の間に見えてきた構造的課題

本事業は、あくまでもアスリートの競技力向上を目的とした支援事業であったが、アスリートを実際に支援しようとすると、その背後にある NPC の組織的課題が徐々に見えてくる場面もあった。特に、紛争や情勢不安の影響を受けている国においては、そもそもスポーツに関するインフラや制度が十分に整備されておらず、NPC がアスリートを長期的に育成・支援するための機能を十分に果たすことが難しい状況も見られる。

ただし、そのような中でも、パレスチナ NPC のように、何が必要かを自ら考え、組織的な強化を図ろうとしている事例も存在する。今回の事業では、チーム全体を俯瞰する立場のコーチや新たな種目に対応するためのコーチ、理学療法士を帯同させるなど、明確な意図を持った人員構成が見られた。これは、限られたリソースの中でも NPC が意図的に育成機能を高めようとしている現れであり、支援側としてもその努力を正しく認識し、応援していく姿勢が求められる。

一方で、アスリートの目標設定や計画立案のスキルに課題があるケースも多くみられた。たとえば、キャンプの最終日に行った SMART な目標設定に関する指導では、目標が抽象的・非現実的な内容にとどまっていることが確認され、現実的な達成可能性やプロセスの具体性が不足していた。こうした知識やスキルは、本来 NPC やコーチが継続的に指導・支援すべき内容であり、アスリート個人に委ねるべきではない領域でもある。

今回、明示的にコーチ育成の要望を示してきたのはパレスチナのみであったが、他の NPC においても同様の支援ニーズが潜在的に存在していたと考えられる。なお、コーチやスタッフの育成は、アスリートへの直接的な支援を持続可能なものにしていくための基盤であり、長期的な視点に立てば、こうした支援者へのアプローチもアスリート支援の一環として捉えることができる。今後は、選手個人への働きかけに加えて、支援を支える人材や組織の在り方についても丁寧に見極めながら、必要に応じた支援の形を模索していくことが求められるだろう。

3) 支援の設計における留意点と将来に向けた示唆

本事業の主たる目的は、国際情勢が不安定な地域のパラアスリートに対して、トレーニング機会を提供することであった。しかし、私たちが実際に設計・運営したプログラムでは、単なる練習機会の提供にとどまらず、アスリート一人ひとりの学びや気づきを引き出すような丁寧な仕掛けを数多く組み込んだ。日々の振り返りの時間や、目標・課題の再確認のプロセスを通して、アスリートたちは自らの競技に向き合う意味を言葉にし、時には「HOPE（希望）」という言葉を用いてその想いを語った。

この「HOPE」は、単なる感情表現ではなく、彼ら自身が困難な状況下でも競技に取り組む理由や意義を見出す過程のなかで自然と紡がれたものである。同時にそれは、私たちのチームがこの事業に込めた願いとも重なっている。事業愛称である High performance support for Overseas Para athletes under Emergency の頭文字をとった「HOPE」は、私たちの支援活動の根底にある想いを象徴するものであり、それが各国のアスリートたちの口から自発的に語られる場に立ち会えたことは、私たちにとっても大きな励みとなった。

こうした丁寧な関わりを通じて、アスリート自身が競技に向き合う意味を再確認し、次のステップに向けて意欲を高める場面は多く見られたが、同時に、このような成果を今後も再現性をもって生みだしていくためには、さらに精緻な設計と体制整備が求められると考えられる。

たとえば、来日前の段階で選手やコーチと目標・課題を共有し、準備を整えておくことができれば、滞在期間中の学びの質はより一層高められるだろう。今回の事業では、アスリートのみならず、その周囲のコーチや理学療法士といった支援スタッフの参加も受け入れ、現場で共に学ぶ構造が自然と生まれていたが、これはアスリート支援の質を高めるうえで極めて有効なアプローチであった。特にパレスチナからは、明確にコーチ育成のニーズが示され、支援内容にも反映された。その他の NPC においても、滞在中の様子を通じて、同様の支援ニーズが潜在的に存在していることがうかがえた。

コーチやスタッフの能力向上は、選手のパフォーマンスを支える土台であり、選手本人への支援と分かちがたく結びついている。今回の事業の随所で見られた支援の在り方は、まさに私たちのチームがこれまで積み重ねてきたコーチ育成・人材育成の知見と実践に裏打ちされたものであり、それが自然なかたちで組み込まれていたことは、今後の支援のあり方に対しても一つの示唆となるだろう。

もうひとつ留意すべきは、こうした取り組みを一過性のものとせず、継続的な関係性へと発展させていく視点である。今回の事業では、帰国後もアスリートからトレーニング映像の共有が行われたり、コーチとの対話が継続されたりと、単発の支援にとどまらない関係性が築かれていた。このような関係の中でこそ、アスリートは自律的に学びを継続し、各国における持続的な発展の芽が育まれていく。

私たち日本体育大学のチームは、こうした支援の現場において、相手のニーズに丁寧に耳を傾け、共により良いものを創っていくことを何よりも重視してきた。自分たちのやりたい支援を一方的に展開するのではなく、相手の状況や課題に「寄り添い」、共に考え、共に歩いていく——そうした姿勢が、最終的には持続可能な発展を促し、関係性そのものを深めていく力になると信じている。

こうした姿勢は、外務省が掲げる「人間の安全保障」や「寄り添った外交」といった日本外交の理念とも親和性が高く、スポーツを通じた国際協力においても、単なる支援者ではなく「共につくるプレーヤー」としての日本のあり方を体現するものとなり得る。特にアジア地域においては、第5回アジアパラ競技大会（2026/愛知・名古屋）のような具体的なマイルストーンを視野に入れながら、日本が「誰と、どのように関わるのか」を戦略的に構想し、アスリートの成長と地域のつながりの両面を育むような支援のあり方が今後さらに求められていくだろう。

スポーツ庁委託事業

令和6年度 ポストスポーツ・フォー・トゥモロー推進事業

(国際情勢に応じた海外アスリート等支援事業)

事業成果報告書 (SFT-NSSU HOPE プロジェクト報告書)

執筆者：伊藤雅充・高野文子 (日本体育大学)

令和7年(2025年)3月31日